# 華の軌跡

たまもおぜん

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

最強の一角と名高い猟兵団〈西風の旅団〉の離散。団員と離れ離れになり、行き場を無くした少女――――リーリャは、わずかなアテを頼りにエレボニア帝国、トールズ士官学院１年Ⅳ組に入学し、そこで思いがけない再会を果たす。

初めての学園生活。仲間と共に日常を歩む元猟兵の少女は何を見るか。

※オリ主はフィーの戦友という設定です。基本的には原作をなぞる形で進めていきますが、オリ主はⅦ組の所属ではありません。

※多少の独自解釈があります。

# 目次


Prologue 1
初めての 4
入学式 9
桃色姉妹 14
Ⅳ組女子's 20
SSDD 26
幸せな自分 36
無力 46
準備期間 53
実技試験 62
対人戦闘 73
再開、過去（前） 81

# Ｐｒｏｌｏｇｕｅ

七曜暦１２０４年初頃
ゼムリア大陸西部、クロスベル自治州…

総資産額大陸一を誇るＩＢＣ（クロスベル国際銀行）本社を擁し、大国エレボニア、カルバートに挟まれ大陸横断鉄道の要所ともなっている経済・貿易都市クロスベル。

その一角にひっそりと存在する裏通り。煌々としたネオンが放つ光に妖しく照らされ、街を包む昼間の喧騒から切り離されたその通りのまた奥。黒一色のスーツにサングラスの、明らかに一般人ではない男二人に守られている建物、その正面の出入口より一人の少女が出てくる。

綺麗なブロンドの、肩に掛かるくらいのサイドテールを揺らすその少女は笑顔を浮かべ、しかし僅かに落胆の雰囲気を滲ませながら、今しがた通った出入口の方に振り返る。

「…じゃ、おじさん。またいつか。」

旧知の友人と別れる様にそう言う少女。

少しの間を置いて、その言葉に反応したかの様に同じ出入口より大柄な男がゆっくりと出てくる。

焦げ茶色の髪をオールバックにし、カーキ色のスーツに身を包んだ男。服の上からでも分かる強靭な身体とその鋭い眼光は、そこら辺のチンピラとは一線を画す強者の風格を漂わせている。

入り口を守っていた黒服達が、慌ててその男に頭を下げる。男はその黒服達を気にせず、目の前に居る少女に尋ねる。

「……これから、どうするつもりだ？」

そう聞かれた少女は男から視線を外し、建物の合間に覗く空を見上げながら僅かに考える。

「うん…取り敢えず、帝国方面に行ってみようかな…って。」

頭の中の纏まらない考えを、そのまま口に出して呟く様に、静かに。

「…どうせ、あては無ェんだろう。」

男は、少女の言葉を切り捨てるように言い切る。
図星だったか、次に繋げる言葉も見つからない様に、その少女は口を閉じる。
「……。」
「だろうな…こいつを持っていけ。」
僅かな沈黙の後、男は呆れたような声でその様子から勝手に納得する。それから、予め用意していたのだろうか、いくつかの書類を無雑作に持ってくると、少女に対して押し付ける様に渡した。
それを受け取った少女は、疑問を浮かべながら書類に軽く目を通す。
「これって…？」
それは、エレボニア帝国の入国許可証や、偽の身分証明書等だった。
クロスベルマフィアが、エレボニアの高官と癒着している市議会の帝国派議員から入手し、逃亡や密輸の際に良く使われる偽装書。いや、帝国から直に横流しされているので、本質的には本物と言えるかもしれない。
どちらにしろ、おいそれと他人に渡すものでは無い。
「タダの余り物だ、勝手に使え。」
しかし男は、まるで何でもないとでも言うかの様にそれだけ言うと、ゆっくりと踵を返し中に戻って行く。
その書類の中には、場違いな証書が紛れ込んでいた。少女はそれを見つけ、男の言わんとしている事を悟ると、何とも言えないような笑みを浮かべて呟いた。
「…うん、ありがとうね。おじさん。」
書類を脇に抱えながら、裏通りを歩く少女。その抱えている書類束、その中から、一枚の証書が頭を覗かせている。目立つのは、赤地に金の一角獣の紋章。
『――――トールズ士官学院　入学申し込み書類』

「若頭、さっきの奴は一体誰なんですかい？」
少女が立ち去った後、脇に着いていた黒服達の一人が男に疑問を投げかける。
男はその鋭い眼光を僅かに弱め、手の届かない様な遠くを見る様に視線を上げる。
「……家族、みたいなモンだ。大分昔の、な。」

# 初めての

１２０４年３月３１日　朝
エレボニア帝国、トリスタ…

『――――――本日はヘイムダル方面行き大陸横断鉄道をご利用いただき、ありがとうございます。次はトリスタ、トリスタ。１分程の停車となりますので、お降りになる方はお忘れ物の無いようご注意ください。』

車内に響くアナウンスが、沈みかけていた私の意識を引き戻す。窓の外では既に、疎らにだが農場や民家が流れ始めていた。線路の先、遠くに見えている街がおそらくトリスタだろう。

早朝にクロイツェン州ケルディックを出てから1時間程、ずっと列車に揺られて乱れてしまった髪を軽く整える為に、愛用のキャリーバッグより折りたたみ式の手鏡を取り出す。色素の薄いブロンド、肩に掛かるくらいの長さの髪を、左側でサイドテールにしている。瞳の色は青で、顔は…まぁ平均くらいな私――――リーリャ・マルセイユは、うたた寝の際についたのであろう後頭部の寝癖を直そうと、手櫛で軽く後ろ髪を梳かしている。

「これでオーケーっと。」

寝癖が目立たない程度に直してから手鏡をバッグに放り込み、顔を上げたついでに改めて車内を見回す。

私の他にも結構な人数の客が乗っており、大体がトリスタにある学校「トールズ士官学院」の制服に身を包んでいる。制服のカラーは殆どが緑、つまり平民生徒で、たまに白制服…貴族生徒が混じっている。何で貴族なのに普通列車に乗っているのだろうか。そんな私は緑制服、つまり平民である。

「この制服、微妙にスカートが短いんだけど……と？」

そんな中で偶然目にとまったのは、白とも緑とも違う深紅の制服だった。着用者は、自分より前の方に座っているので顔は見えないが、綺麗な金髪をツーサイドアップにしている女子だ。

しかしおかしい。士官学院の制服は緑と白、平民制服と貴族制服の二種類しか無かったはずだ。入学案内書にも、特に説明はされていなかった。

となると、もしかしたら今年度から発足した新クラスかもしれない。留学生クラスとか、資産階級クラスとか。皇族クラスとか…いや、それは無いか。

『トリスタ、トリスタに到着しました――――』

到着アナウンスが流れると同時に、そこで疑問を打ち切る。今ここで考えても分からない事は分からない、必要に応じて後から知らされるはずだ。

「…忘れ物は無し、と。」

列車が完全に停止するのを待ってから、荷物を持って立ち上がる。日用品や着替えを仕舞っているキャリーバッグに、貴重品や小物を入れているショルダーバッグ。それと、縦３０リジュ、横１．２アージュ程度の革ケースだ。

ショルダーバッグを肩に掛け、キャリーバッグを右手で引く。革ケースは左手で、うん、重い。

キャリーバッグはともかく、この革ケースが結構な重さになっている。そのうえ長さもあるので、かなり持ちにくくなっている。出来ることなら今すぐにでも手放したいが、それは流石に出来ない。何故なら、このケースに入っているのは私の武器だからだ。

トールズ士官学院では、武術が必修科目になっている。様々な武器、武術の中から自分に合ったものを選択し、それを極めて行くのだという。その為、武器を持っていない生徒は事前に申請すれば学院のものを借りられるらしいが、その貸し出される武器が自分に合っているとは限らないし、もしくは使い込まれた安価な旧型かもしれない。それはなんとも嫌なので、事前に武器屋で新しい武器を購入しておいたのだ。

その大荷物のせいで階段の昇り降りに苦労したものの、なんとかホームを抜け待合室に出た。

「……よし。」

気分を新たに気持ちを整えて、正面に見える扉より外に踏み出す。
「うわぁ…結構、というより思ったより綺麗な街だねぇ。」
駅から出た私の眼に映ったのは、丁度時期を迎えて満開のライノの花だった。土が良いのか、木を包み込む勢いの花達が、葉の緑といい感じに混じりあっててとても綺麗だ。
赤みのある石を敷石に使っており、街並みからは帝都の面影を感じ取ることができる。駅前には公園があり、その周りには色々な店が軒を連ねている。見た限り、生活に必要なものは大体揃えられると思う。
私は今日から最低でも2年間、このトリスタで生活を送ることになる。
「だいぶ住みやすそうで、良かったなぁ。」
街の中心部を流れている川、その川に掛かっている橋に差し掛かる。水は澄んでいて、時折魚が跳ねる姿も確認できる。正面に視線を戻すと、遠くにある一際高い建物が目に入った。おそらくあれが、私の入学するトールズ士官学院なのだろう。
そうやって遠くを見ながら歩いていたからか、珍しく気分が浮かれていたのか。
「うわっ、と!」
「きゃ…っ!?」
不意に誰かとぶつかってしまった。
私は咄嗟に、武器ケースをつっかえ棒にしてバランスを取ったため転ばなかったものの、ぶつかった相手はそうもいかず尻餅をついている。
「あ、ごめん!大丈夫?」
慌てて謝り右手を差し出す。転んだ相手も、私と同じ平民の新入生女子の様だ。
「だ…大丈夫です。」
その女子は、私が差し出した手を取ってゆっくりと立ち上がる。緑制服、身長は私より少し低い位で、比較的短めな桃色の髪に綺麗な紫の瞳。おとなしそうな顔立ちで、綺麗と言うよりはカワイイの方が

しっくりくるかもしれない。こう言ってしまってはあれだけど、なんか…小動物って雰囲気がする。
　その女子はスカートに着いてしまった土を軽く払うと、こちらに向き直り慌てて頭を下げてきた。
「こちらこそ、ごめんなさい！私があんなところに立っててていなければ…」
　申し訳無さそうな様子で謝るその女子。しかし今回の件は、前方不注意で完全に私に非があるだろう。
「あぁ、いや、謝らなくてもいいよ～。私もよそ見してたんだし。」
　アハハ…と私は愛想笑いを浮かべ、後ろ頭を掻きながら言う。だが、その女子は依然畏まったままだ。うーむ、これじゃ対応に困る。
「ですが…」
「じゃあ、お互いに無事だし今回のはナシにしようよ。」
　そんなに申し訳無さそうにされると、こっちまで重苦しくなる。
　私はその女子の言葉を無理やり遮り、右手の人差し指を立てながら笑顔でそう提案する。これなら公平で、どっちも損しないだろう、うん。
「…ふふっ、それもそうですね。」
　一人で勝手にうんうん頷いていたら、その女子は小さく笑いながら納得してくれた。よし、これで初日から重苦しい雰囲気になることは避けられた。微妙に恥ずかしいけど。
「えーっと、私、モニカって言います。クラスはⅢ組です。」
　その女子――――モニカは姿勢を正すと、真っ直ぐ私の顔を見ながら笑顔で簡単に自己紹介を行った。その紫色の瞳はとても澄んでいて、気弱そうながらも奥底にはしっかりとした芯を感じる。正直眩しい位かもしれない。
「モニカさん、でいいかな…？私はリーリャ、クラスはⅣ組。教室は違うみたいだけど、これからよろしくね～。」
「はい、こちらこそ宜しくお願いします、リーリャさん！」
　私も名前とクラスを言い、笑顔を返した。よかった、正直うまくやっていけるかどうか少し不安だったけど、これは幸先が良いかもし

れない。
「じゃ、行こうか～」
「はい」
そろそろ入学式が始まる頃だ。私とモニカは少し早歩きになりながらも、学院の方へと横に並んで歩き出した。

# 入学式

３月３１日　朝

トールズ士官学院、講堂…

士官学院に到着した私はモニカと一旦別れて、学院左手側、入学式が行われる講堂に入っていった。持ってきた大きな荷物は、後で学生寮の部屋に届けられるらしい。いきなり手荷物検査とかされないか、少し心配だ。

広く、隅まで手入れの行き届いている講堂の中、規則正しく並べられた多くの椅子に、期待に目を輝かせる新入生達が整然と座っている。その新入生達の視線の先、少しばかり高くなっているステージの壇上では、身長２アージュはあろうかという巨躯の老年――ヴァンダイク学院長が、熱弁を振るっている。

「…んむ……はっ…!?と、いけないいけない…。」

一方私は、早朝からの出発のおかげか数回程睡魔に襲われかけていて、コックリ行ってしまわない様になんとか抑えている所だ。元より、長く座って人の話を聞き続けるのは得意な方ではないし、そこまで経験したことも無い。やっぱり、身体は動かしてこそだ。

「――最後に、君たちに１つの言葉を贈らせてもらおう。」

学院長の演説も終盤に入ってきたらしく、その声に一層の力強さが増す。辛うじて睡魔を振り切った私は、せめて最後くらいはちゃんと話を聴いておこうと、壇上の学院長の方に視線を向ける。

ここトールズ士官学院は、約２２０年前に時の皇帝〈ドライケルス大帝〉が創設した学院だ。そのドライケルス大帝は、エレボニア帝国の内戦〈獅子戦役〉を終結させた英雄として知られているらしい。最近は、軍の主要部隊の機甲化に伴い戦術・戦略ドクトリンが変化、この学院の役割も変わってきている。と、たった今学院長が言ってた。

『若者よ――世の礎たれ。』

檀に両手を置いて身を乗り出した学院長が、強調する様に、一際大

きく聞こえる様に言う。
「〝世〟という言葉をどう捉えるのか。何をもって〝礎〟たる資格をもつのか。これからの2年間で自分なりに考え、切磋琢磨する手がかりにして欲しい。――ワシの方からは以上である。」
最後に笑顔を見せる学院長。
「世の礎たれ、かぁ…。」
学院長の言葉に、思わず考え込む。世とは何か、礎とは何か…導力革命以来、世界は慌ただしく変化してきており、今の〝世〟を的確に捉える事は極めて困難だと言える。その〝世〟を支える〝礎〟とは何か、それに対する自分の答えを見つけるのも目標、という感じか。大帝も、随分と厄介な宿題を遺していったものだ。
「以上で、トールズ士官学院、第215回入学式を終了します。以降は入学案内書に従い、指定されたクラスへ移動すること。学院におけるカリキュラムや規則の説明はその場で行います。以上――解散。」
学院長の退檀の後にステージへと上がってきた、モノクルを掛けた男性教官がそう言葉を発する。やっと終わった。私は小さく身体を伸ばしてから立ち上がり、移動する他の新入生達の流れに乗って、講堂の外へと向かった。
その間に、何人か赤制服を着た生徒を見かけた。黒髪の爽やかそうな男子と、オレンジの髪色の小柄な男子、それとメガネを掛けた三つ編みの女子だ。この三人には、特にこれといった特徴のある共通点は見つけられない。では、その赤制服は何なのだろうか。頭の片隅でそう思考しながら、左手にある本校舎へと向かった。

---

入学案内書に記されている、私が所属する事になったクラスはⅣ組。本校舎の正面入口から入って奥の階段を二階へ、そこから右に少し進んだところにある。平民クラスとはいえ、由緒正しい士官学院なだけはあり、教室の設備や内装は日曜学校とは比べ物にならないと思われる。

どうやら私の到着は少し遅めだった様で、既に教室にある机は殆どが埋まっていた。多少慌てて入学案内書を頼りに、自分の席を探す。
「…あった、あそこかな。」
私の席は窓際の列、一番後方だった。これは運が良いのか悪いのか、取り敢えず、多少居眠りしてもバレなさそうではある。もっとも、この士官学院に易々と居眠りを見逃す教官は居なさそうだけど。
何はともあれ、入学案内書を自分の机の上に置き、席に座る。椅子も机も多少大きめで、造りもしっかりしている。且つ、所々に小さく入った優美な意匠が、質実健剛な気風と貴族文化が混ざり合っている帝国らしさを引き出している。この机欲しい。
「いいな〜一番後ろの席、アタリみたいなものだよね！」
不意に話しかけて来たのは、私のひとつ前の席に座っていた女子生徒だ。茶色い、ナチュラルなミディアムヘアのその女子は上半身を捻って両手を背もたれに掛け、人懐っこい笑顔を浮かべながらこちらを向いている。
特に悪意の無い笑顔を向けられるのはまぁ悪い気もしないので、私も笑顔を返した。
「でも教官の話が聞こえづらいのはなぁ。ほら、この学院って、授業が結構難しいって噂じゃん。」
「んー、確かに…それもそうだよね。あ、ワタシはコレット、趣味はショッピングと食べ歩きだよ。」
その女子――コレットはうんうん頷くと、思い出したかの様に自己紹介を行う。
「私の名前はリーリャ。趣味は…射撃競技、かな。これから宜しくね、コレット。」
「うん、ヨロシクね♪」
私も自己紹介を返す。趣味は咄嗟に考えたものだけど、完全に嘘ではない、はず。前の席のショッピング娘コレット。よし、覚えた。
我ながら酷い覚え方だ、と思っていると、コレットが更なる質問を繰り出してきた。
「リーリャは趣味が射撃なんだよね。ってことは、選択武器もやっぱ

り導力銃なの？」
「んー？まぁそうだねぇ、武術科目も銃で行くつもりだし。」
　私には剣・槍の才能は無かったらしく、これまでそういった刃物や長物を持っても全く使いこなせなかった。剣が得意なある人物に色々と聞いたりしてみた事はあるものの、呼吸法やら足運びやらが全然理解出来なかった。つまり、私は格闘武器を全く使えない。
「おぉ…何かカッコイイね。」
　何故かは知らないが、コレットが羨ましがる様に目を輝かせている。
「うーん、格好良いのかなぁ…」
　正直、導力銃が格好良いとは思えない。剣なら〈剣仙〉ユン・カーファイを始めとし、〈光の剣匠〉ヴィクター・S・アルゼイドに、南のリベールには〈剣聖〉カシウス・ブライト、前に居たクロスベルなら〈風の剣聖〉アリオス・マクレイン等々、格好良い超人が結構居る上に、様式美的な優雅さは帝国の気風にも合う。それに対して銃はどうか。残念ながら、そういった話は全く聞いたことがないし、単なる一般兵の武器としか見られていない。
　だから、銃が格好良いと認知されているとは到底思えない。
「何かこうカッコよく導力銃構えてると、出来る女って感じがするよ。」
「あーなるほど、そういう…。じゃあ、コレットも銃に？」
　あぁ、イメージで喋ってただけか。軽く脱力しながら納得する。
「いや～ワタシは無難に剣とかで良いかな、って。導力銃は扱いが難しそうだし…。」
　頭を掻き、苦笑いを浮かべながらそう言うコレット。
　そんなものかなぁ？銃は、究極的に言えばトリガーを引ければ良いのに。
「確かにメンテは面倒かもしれないけど、使ってみると意外と簡単だったりするよ？小口径の拳銃なら反動も小さいし。」
「うーん、そうなのかな…？」
「まぁ、自分のやりたいと思った方で良いんじゃないかな？」

しかし、嫌がっている所を無理に勧めても仕方がない。これは、本人が決めるべきことだろう。

と、そこで教室の扉が開き、担任教官が入って来た。一斉に前を向いて静まる新入生達。

「あ、教官だ。じゃあリーリャ、また後で話そうね。」

前を向く直前に、コレットはそう小声で言った。

橋で会ったモニカに、初めてできた同クラスの友達、コレット。やっぱり、友達が出来るというのは悪い気はしない。少なくとも、今私は幸せなんだろう。

そんな事を考えながら、教壇に立った教官が始めたオリエンテーリングに耳を傾けた。

# 桃色姉妹

４月１０日　放課後
トリスタ市街…

トールズ士官学院に入学してから早１０日。新しい環境に慌ただしかった新入生達も学院生活にも慣れ始め、荷物の整理や新しい交友関係も一段落し、落ち着いて来た頃。
私は友人のコレットに連れられて、トリスタ駅前の商店街を訪れていた。
「おぉ～、さすが帝都近郊。色々と揃ってるよ！」
目を輝かせながら辺りを見回し、落ち着き無く歩き回るコレット。
「あー…はしゃぎ過ぎると危ないよー。」
「うんうん、大丈夫だよ～♪」
一応、気を付けるように声を掛けてはみるものの、私の声は多分届いてはないだろう。
「…筋金入りのショッピング娘。」
私は溜息混じりに呟いた。

今日の授業を全て終え、ＨＲの後に担任教官が教室から出ていって直ぐ。何時も通り帰り支度を進めていた私の目の前に立ったコレットが、可愛らしく両手を合わせて、首を傾げながら「リーリャ～、一緒に商店街に行こう。」と誘ってきた。
コレットが言うには、生活の方も落ち着いてきたので、少しでもいいから商店街の方を見て回りたいらしい。特に断る理由も無かったので直ぐに了解し、学院から直接駅前までやって来た所だ。

確かに、ここトリスタは帝都から鉄道で３０分程度の距離に在り、品揃えは結構豊富。さらに、学生の街ということもあって、平日の夕方とは言えそれなりの活気はある。
「あ、ここはブティックみたい。リーリャ、ちょっと入ってみようよ～

！」
そう言って手を振りながら私を呼び、入店する。まぁ、コレットの活気は頭一つ抜けていると思う。水を得た魚の様な雰囲気のコレットの後に続き、私もブティック〈ル・サージュ〉に入っていく。
「ほら、見て見て。カワイイのがいっぱいあるよ。」
既に物色を初めていたコレットが小さく手招きし、私は言われるがままその脇に向かう。
コレットが見ていたものは、アクセサリー類だった。ネックレスにブレスレッド、髪留め等、様々に光り輝く小物類が陳列されていた。一つ１８００ミラと比較的お手頃な値段だが、こういった装飾品にそこまで興味の無い私でもちょっと心が惹かれる位に出来が良い。
「あれ、そういえばアクセサリーって…？」
私はふと気付いてコレットの首元へ目線を動かす。そこには、店内照明に照らされて、綺麗な銀に光るネックレスがあった。朝に一緒に登校した時から着けていて、感想を求められたりもした。言うには「シルバーチェイン」とかいう名前らしい。もっとも、特に詳しくもない私は「カワイイ」と連呼するだけだったが。
「うん、これカワイイから買ってみようかなって。」
コレットはそう言うと、一つのブレスレッドを手に取って自身の腕に合わせてみる。
「今日は様子見だったんじゃないの？」
私は腰に手を当てながらそう言い、そのブレスレッドを横から覗き込む。確かに、暖色系の色合いはカワイイと思えるが…。
「ふふふ、ショッピングとは時に繊細に、時に大胆に！だよ！」
「はぁ、あぁ…なるほど…」
何故か誇らしげに、胸を張りながら自身のショッピング哲学を声高く宣言する。流石はコレット、と言いたい所だが、他の客の視線が痛い。
当のコレットはそれを気にすることも無く、ブレスレッドを持ってカウンターに向かう。と、そこで
「――――――ちょっとまった！」

女子の声で、急に横合いから呼び止められた。
私とコレットが、同時に声の主のほうを向く。そこに居たのは、紫掛かった桃色の長い髪を左右で三つ編みにして下げた、猫の様な黄色の瞳の女子…同じクラスのリンデだった。
「それも良いけど、こっちの方がもっと良いわよ。」
そう言って出してきたのは、小さな箱に入ったまばゆいシルバーの輝きをもつアクセサリーだった。
「これって…？」
「ほら、今キミが着けているネックレスと似てて、腕と首でいいコーディネートになるよ！」
口早く勧めるリンデは、さらに身振り手振りを加えてそのブレスレットを持ち上げる。
「このシンプルながら深みのあるデザインで腕を持ち上げたときに感じる首元との統一感、これは大人の女性って感じだね！」
その芝居掛かった口調と共にウィンクするリンデ。かなりの話術だ。
「お、おぉ…」
リンデの満面の笑顔と口振りにコレットはかなり押されていて、私もそのトークをただ黙って聞いているだけだ。
「…よし！じゃあ、これ買おっと♪」
それにしても…リンデの喋り方って、あんなに明るかったっけ？
そんな疑問が私の中で広がっていくのを尻目に、コレットは勧められたブレスレッドをカウンターに出す。
「…じゃ、私はこの辺で～」
それを見たリンデは、まるで仕事が終わったかの様にそそくさと店の入口へ向かっていった。
ドアベルが鳴り、店の扉が閉まる。それと同時に、会計を済ませたコレットが笑顔を浮かべて私の方へと歩いてくる。今買ったばかりのブレスレッドを手に持ち、その表情は極めて満足気だ。
「うんうん、いい買い物したよ～。」
そう言うと、流石というべきか、すぐさま箱を開け始める。

「よし、さっそく着けてみよう！」
「もう？…気が早いねー。」
　意気揚々とブレスレッドを取り出すコレット。私は感心したような、呆れたような声を上げる。
「善は急げだよ！」
　自身のショッピング哲学なのかそうではないのか、またもやそう宣言する。
　そして遂に箱が開け放たれ、銀色の、その中身がコレットの手の上に姿を現した。光を艶やかに反射し、シンプルな装飾ながらも美しく輝く「ネックレス」が。
「……ネックレス？」
　一瞬、場が沈黙する。
「だ……だ……」
「あ～これは…シルバーチェインじゃん。」
　シルバーチェインを握り締め、俯いて小さく震える。
「ダマされた――――――っ!?」
　次の瞬間、跳ね上がるように顔を上げたコレットの叫びが、店の隅々まで響き渡った。

---

　０，５秒後…
「リーリャ！追いかけるよ！」
　即座に意識を取り戻したコレットは、直ぐ様リンデを追いかけようと店の外へと駆ける。
「…あっ…りょーかい。」
　あまりの変わり身の速さに、私ですら一瞬ついていけなかった。その間にコレットは既に店の前に出て、周囲の様子を注意深く探っていた。
「……いた！」

唐突にコレットが、指を差しながら声を上げる。その先には、学院の方向から平然と歩いて来るリンデの姿が。これ幸いと茶色い髪をバンバン揺らしながら早足で駆け寄ると、シルバーチェインをリンデの目の前に掲げて詰め寄る。
「これ！ネックレスだったよ！」
「え？あ、はい…そうですね。」
リンデは急に現れたコレットに対して一瞬驚き、訳が分からないといった表情で同意を返す。
「むぅ、うまく騙したね！」
「え…えっ？」
全く状況が呑み込めていない様子のリンデ。その様子は、演技にしては妙にリアルだ。
「見事に引っかかっちゃったよワタシ！」
「あ…あの…」
今のリンデは、傍目から見てもかわいそうな程オロオロしているのが分かる。明らかに何かおかしい。リンデとは教室で何度か見ただけの関係だが、そこまで饒舌でも演技派でもなかった筈だ。間違っても、先程の様な営業トークは無理だろう。だったらどうして……あ、もしかすると。
「……コレット――――」
私が口を開こうとした時に横合いから、呑気な声が響く。
「――――ふふ、大成功ね♪」
全員が一斉に声の聞こえた方向…店の裏側に目を向ける。そこにいたのは、桃色の長い髪を両方で三つ編みのお下げにしている――――
「リンデが……二人!?」
「ヴィヴィ!?」
「あー、ヤッパリね～。」
納得する私に、驚くコレットとリンデ。偽リンデ――――ヴィヴィは、イタズラっぽく笑っている。
「もうヴィヴィ！また何かイタズラしたの？」
「え、ヴィヴィって……」

何となく状況を理解したらしいリンデが、怒ったように声を上げる。
「ゴメンね、お姉ちゃん。ほんのちょっと。」
そう言って小さく舌を出す。そのまま左右の三つ編みを持ち上げると、それを解き始めた。
「あ、ああ！…あーー！」
「ふふふ、良い驚き様ね。はい、代金。」
コレットが驚愕の声を上げる。髪を下ろし終わったヴィヴィは、あらかじめ用意していたのかシルバーチェインの分の代金、１８００ミラをコレットに手渡した。
「あ、うん……じゃなくて！」
「でも代金は払うんだねぇ。」
コレットが押されて代金を受け取り、私はその脇で感心したようなを出す。
「そうよ。面白い事はあと腐れ無く、ってね。」
「ヴィヴィ！」
悪気も無くそう宣言するヴィヴィ。今日はやたらと他人の哲学を覗く機会が多い気がする。そんな様子にまたしても怒るリンデ、それをのらりくらりと受け流すヴィヴィと、いつの間にか軽い姉妹喧嘩が始まっている。
「え～…と。」
被害者だというのに、かやの外なコレット…仕方ない。私は一歩前に出て、パンパンと手を叩き口を開いた。
「――――取り敢えず、喫茶店行かない？」

# Ⅳ組女子’ s

さんさんと照っていた日が傾き始め、段々と導力灯の明かりが付き始めている商店街。その一角にある店の中、コレットを始めとするトールズ士官学院Ⅳ組の女子達が集まっていた。

「本当にすみません！妹がまたイタズラを…」

申し訳なさそうな表情で手を前に組み、桃色の三つ編みを大きく揺らし深く頭を下げるリンデ。というか「また」なのか。

「あー、もういいよ～」

一方コレットは流石にもう責める気も起きなくなったのか、顔に笑みを貼りつけユラユラと手を振っている。大方、色々あってどうでも良くなったんだろう。

ブティックでの騒動の後、一行は駅前の喫茶店〈キルシェ〉に来ていた。夕食時も近いからなのか店内は比較的賑わっており、クラブ活動を終えた後なのだろうか同じ学院生も多い。私たちはその中でも入り口から最も遠い、奥にあるテーブル席に座っている。

その中で、リンデのみは頭を下げる為にテーブルの脇に立っていた。

「ですが……」

小さくそう声を出したリンデは、半分だけ頭を上げ、眉を下げた上目遣いでこちらを伺う。なんだろう、この雰囲気は誰かに似ている気が…あ、モニカか。

あれからモニカとは登校中や放課後、寮内でもそれなりに交友する仲となっている。最近は運動系のクラブ活動に参加したいと言ってたけど、もう決めたのかな？

「…まぁ、確かにコレットも代金もらってるんだし。とりあえず、何か頼まない？」

私はそんな事を考えながら、極めて軽い口調で脇からそう発言する。同じ物が2個あっても特には困らないだろうし、金銭的な損失も0だ。ヴィヴィの１８００ミラは自業自得で、本人も納得している。唯一の被害者リンデに関しては、まぁ、姉妹の問題としてなんとかし

てほしい。
と、いう訳で私やコレットに謝る筋合いはあまり無いと、私はそう思っている。
「ほら、二人もこう言ってるじゃない。」
「ヴィヴィはちゃんと反省して！」
私とコレットの言葉に乗っかり、反省もなにも無いような声で姉に向き直るヴィヴィ。一方リンデはそんな妹の態度に対し、顔を潮紅させる勢いで怒りはじめる。
「はーい」
「もう……っ！」
だがそんな姉の怒りも、ヴィヴィにとっては何処吹く風。その飄々とした様子はリンデの火に油を注いだらしく、またもや姉妹喧嘩が勃発する。といっても、傍から見れば、突っ掛るリンデをヴィヴィが軽くいなしているといった感じだ。しかし、リンデも本気で怒っているようではないらしく、その言語に刺は少ない。おそらく、あの喧嘩も姉妹のコミュニケーションなんだろう。
「…ははは…なんというか、賑やかな姉妹だよね。」
そんな桃色姉妹の様子に、コレットは苦笑いを浮かべながらそう呟く。
「本当に…どっちが姉か分からなくなりそうだこと…。」
……妹、かぁ。

---

陽が沈み、もう半刻程度で闇に包まれようとしている、鬱蒼とした森の中。
草花を揺らし木の根を飛び越え、静かに、されど素早く目の前を駆けるのは、私より二つ年下の小柄な銀髪の少女。後に続く私も、木々の間を走り抜けその背中を追いかけるが、その差は一向に縮まらない。

「……っ」
石を飛び越え、草木をすり抜け一陣の風を巻き起こすは、まるで伝承に伝わる妖精のよう。私は焦りながらも、どこか憧れを含み、その小さい背中に見惚れていた。
そうやってしばらく走っていると、遠方に僅かな灯りが見えてきた。そこには幾つも野営の為のテントが設営されていて、その周りでは慌ただしく人が動き回っていた。それを見た銀髪の少女は、その脚をさらに速める。私も負けじと足に力を込めるが、結局追い越すことは出来なかった。
私はテントに到着すると、なるべく自身に負担が掛からないようにゆっくりと足を止める。先に到着し目の前に居る銀髪の少女は、何時もは無表情を貼りつけているその黄色い瞳を僅かに緩めた。
「……ん、私の勝ち…ぶい。」

---

「……今頃、何処で何してるんだか。」
ふと頭に浮かんだのは、昔の思い出。まぁ、昔といっても精々3年前なのだけど。…血の繋がりがある訳ではないが、私の妹のようだったあの子。
「……リーリャ、どうかしたの？」
ふと気が付くと、コレットが心配そうにこちらを伺っていた。
「ん～？別に何でもないよ。」
大方、今の呟きが聞かれたんだろう。私は思考の海から自身を完全に引き揚げると、我ながらなんとも気の抜けている口調でそう返した。
「――だから！――――！」
直後に聞こえるリンデの声。どうやら、目の前の双子姉妹の喧嘩はまだ続いているみたいだ。ここでも、カウンターに立っているマスターや、空になったグラスを運んでいるウェイトレス、店内にいる他

の客達の注目を一手に集めている。
　このままでは目立つこと此の上無いし、リンデもそれは嫌だろう。そう考えて静かに立ち上がると、横からそっと声を挟む。
「リンデ、ちょっと…ほら…」
　そのままリンデの視線を誘導するように、私は店内を見渡した。
「――――え？あっ…」
　それに釣られて店内の注目に気がついたのか、一瞬そのままの状態で固まったかと思うと次の瞬間には、収穫時期のにがトマトのように顔が思い切り真っ赤になっていた。
「す…すみませんでした…」
　その真っ赤な表情のまま小さく謝ると、ストンと力が抜けたように椅子に座る。うん、すごく恥ずかしいってのは分かる。
「お騒がせしました…」
「あはは、大丈夫大丈夫」
　両手を脚の上で組み、小声でそう言うリンデ。コレットは既に苦笑いだ。さて、どうしよう…微妙な雰囲気になってしまった。
　と、その時。横から私たち以外の声が飛んできた。
「まぁまぁ。若いと色々あるのかもしれないけど、喧嘩はしないの。」
　私たちの視線が声の主に集まる。そこに居たのは、右手にコーヒーカップを４つ程載せているトレーを持ち、テーブルの脇にやって来たキルシェのウェイトレスだ。
「あ、ドリーさん。」
　さすがコレット。既に知り合いなのか、即座に名前で呼んでいる。
「はい、コーヒーでも飲んで落ち着いて。」
　側に来たそのウェイトレス、ドリーさんは温かいコーヒーの注がれたカップを、慣れた手つきで手際良く並べていく。あれ、コーヒーって注文したっけ？
「コーヒーって…誰かもう頼んだ？」
「これはマスターの奢りよ。じゃあ、若者同士仲良く、ね。」
　私の疑問に応え、そう残して去っていくドリーさん。カウンターにいるマスターの方を見ると、新聞越しにウィンクが返ってきた。多

分、気を使ってくれたのだろう。
「ふふ、つまりタダ飲みね。」
「あ、ありがとうございます！」
小さく笑いカップに口をつけるヴィヴィと、ちょこんとマスターに頭を下げるリンデ。
「おぉ～やったね♪」
「うん、これはラッキー。」
コレットもその気遣いに喜び、私もそれに同意する。そして、まるで示し合わせたかのように４人同時に、そのコーヒーを一口。
「「「「……ふぅ」」」」
ちょっと熱かったけど、誰が言ったか、喉元過ぎれば熱さ忘れる。熱いコーヒーが暖かくなり、カップの底が見えてきた頃には、既に皆は喧嘩の事などどうでも良くなっていた。

---

同日、１８：４５

コレット達と一旦別れた私は、商店街の外れにひっそりと存在する質屋〈ミヒュト〉に来ていた。
店の看板は〝準備中〟となっていたが、まだ灯りがともっているから多分大丈夫だろう。そう考えながら、幸いにもまだ鍵の掛かっていなかったドアを開ける。
「…なんだ、もう閉店時間は過ぎてる。ガキはさっさと帰んな。」
入るなり、新聞から目を離さずぶっきらぼうにそう言い放つ店主。私はそれを無視し、扉を閉めてカウンターに近づく。
「…ナインヴァリのアシュリーさんの紹介。」
カウンターをはさみ、ミヒュトの目の前でそう呟く。
「…ちっ……で、要件はなんだ。」
ようやく新聞から顔を上げ、こちらを向く店主。その表情は、至極面倒そうだ。

「これを用意して欲しいの。」
私はポケットから、一枚の紙とミラ札を一束取り出すと、それをカウンターに置く。ミラは前の稼業で随分と稼いだが、特に使い道も無かったので溜りに溜まっているので問題無いし、士官学院の入学金や各種生活費も、これで賄えている。
「なんだ…．７６２×５．１リジュ装薬弾に…４リジュグレネード弾…？共和国製のタマ、しかも火薬式じゃねぇか。戦争でも始めるのか？」
紙を見て、ミヒュトの表情が変わる。まぁ別に大丈夫だろう、それだけのミラは出している。
「んーん、タダの備え。それと、もう一つ。」
「……何だ」
そして、私にとっての本題に入る。先程の買い物は、この要件を上手く通すための色着けに過ぎない。
「〈西風の旅団〉について…何でもいいから…。」

# ＳＳＤＤ

七曜暦１２０２年
大陸中西部　某地域・・・

不意に、焦げついた臭いが混じった風が吹き抜け、巻き上げられた砂埃がカーテンの様に舞う。照りつける太陽に焼かれた大地は既に乾ききり、陽炎によってユラユラとその像を揺らしている。

平和だった頃は駅前とでも呼ばれていたであろうこの場所。しかし今は、ある家屋は半壊して屋内が顕になっており、ある教会は既に瓦礫にまみれ剥き出しの柱となっていた。

時節、遠くから乾いた破裂音が鳴り響く。ここは、何処かのありふれた戦場。

廃墟となった村に隣接している街道跡。砲爆撃により所々が掘り返されている道だった所を、煙を巻き上げながら走るトラックの車列が一つ。

その先頭から二番目を走る、ヴェルヌ社製４トリム導力トラックの荷台の隅。旧式の導力ライフルを小脇に抱え、煤けたローブをフードまで被って目立たぬよう小さく座っている私…リーリャ・マルセイユは、不意に吹き付けた風に煽られ脱げかけたフードを、慌てて深く被り直す。

周囲には同じように銃を持ち、ボロボロのローブや軍服らしきものを着ている男達が、同じようにトラックの荷台に詰め込まれていた。その男達の目は溢れんばかりの熱意を滾らせているか、さもなくば絶望に生気を失っているかのどちらかだ。

遡ること数年前。この地方で実権を握っていた王国に対し、地方の少数民族が反乱を起こした。所詮は地方農民の反乱、何時も通り直ぐに鎮圧されるだろうというのが大方の予想だった。だがその予想は、カルバート共和国が少数民族に対し、大々的な支援を始めた事で簡単

に覆された。
後ろ盾を得た少数民族の反乱は、王室に反する政治・思想団体の扇動や、抑圧されていた低層階級市民の合流によって次第に反政府軍の形を成す。これに危機感を覚えた王国はエレボニア帝国に支援を要請し、帝国政府はこれに応じる。
こうして、一地方の抗争に過ぎなかった戦火は瞬く間に全土に波及し、泥沼化。王国軍と反政府軍の内乱だったものは既に、エレボニア帝国とカルバート共和国の代理戦争の相様を呈していた。

今私が乗っているこの車列も、その反政府軍の部隊の一つだ。
私たち〈西風の旅団〉は、共和国政府を通じて反政府軍司令部と契約を結んだ。契約内容は「反政府軍部隊の援護」。反政府軍司令部は、中部にある王国軍支配地域の中央に存在する交通の要衝「サンタ・クララ市」を決戦の場として定め、全方面から戦力を集結させていた。〈西風の旅団〉は秘密裏に国境を越えて王国軍支配地域の内部に浸透、反政府軍の攻撃開始と共に王国軍の側面を突く手筈となっている。
その為私たちは王国に存在を悟られないように、団長の命令で一旦散会して各々が独自にサンタ・クララ市を目指していた。フィーは多分団長に着いていってるだろうなぁ。
「…ん……？」
錆びたトラックの出す騒音に混じり、遠くの空から微かな導力ブースター音が耳に届く。私は少しの警戒と共にフードを少し捲り上げ、空を見上げて目を凝らす。
距離にして大体１０セルジュ程だろうか、小さく黒いモノが空に浮かんでいた。だが、少しばかり遠く、はっきりとあれが何かかは分からない。…まぁ、鳥は普通ブースター音を出さないし、戦場で気球を上げるバカも居ないだろう。だとすれば…
「あの飛行艇は…」
「ラインフォルトの、恐らく王国軍の航空部隊だろうな。」
目の良い何人かの男達は既に、あれがラインフォルトの飛行艇だと見抜いていた。ラインフォルトと言えば、世界的に有名なエレボニア

帝国の大規模な兵器メーカー。だとすると、あの飛行艇は帝国政府経由で王国軍に供与されたものだろう。
「ふぅ……。」
緊張して強張った身体を解くと同時に、嫌な警戒感が高まってくる。
少なくとも、あの飛行艇は私たちを爆撃する為に飛んできた訳ではないらしい。もしそうだったら私が気付く前に、この目立つトラックごと導力砲の長距離射撃によって吹き飛ばされている筈だ。少なくとも今すぐ爆撃に巻き込まれて、ズタズタになった自身の死体を野風に晒す心配は無いと思う。
しかし、何の目的も無く飛行艇を飛ばすほど王国軍も馬鹿では無いだろう。だとすると、他に考えられるものとしては、着弾観測か航空偵察。今耳を澄ましても砲撃の音は聞こえないので、あれは多分偵察だろう。
「……っ」
息を飲み込み、抱えたライフルを強く握る。ヤバい、これは非常に不味い。私は焦燥感に精神を焼かれながらも、何時でも動けるよう体勢を整えておく。
僅か１０セルジュ先にいる偵察機だ。砂煙を上げながら走るこの車列に、気が付いていない訳が無い。戦車や装甲車こそ無いが、歩兵を満載したトラックに、大口径機関銃を取り付けたピックアップとそれなりの規模の部隊だ。安々と見逃す事はしないだろう。待ち伏せか、はたまた爆撃か。遅くとも本日中には王国軍の攻撃があるだろう。
…移動ルートを見直した方が良いかもしれない。
少しばかり時間的余裕は無くなるが、このままトラックで移動するよりはマシだろう。
「…取り敢えず…運転手交代のタイミングで抜け出して――――」
そんな小さな呟きが終わる前に、私の身体は宙に浮かんでいた。
次の瞬間、衝撃。

「――――!?」
息が詰まる。そのまま激しく何かに叩き付けられ、無様に何度も地面を転がる。
「う…っぁ……けほっ」
耳が…耳が聴こえないくらい耳鳴りが酷い。視界が明滅する、平衡感覚がおかしい。
全身麻酔を施されたかのように、身体が全く言うことを聞かない。
衝撃で私の中身が掻き回されたのだろうか、内臓を直接突き上げるような吐き気で、何度も咳が出てくる。あぁ、朝は消化の良いものにしといて良かったな。
吐き出された空気をもう一度求めるよう必死に息を吸い込むが、肺も言うことを聞かず短い喘ぎを繰り返すのみ。
「…はぁ……はぁ…っん」
いったい何秒経ったのだろうか。視界の明滅が収まり、耳鳴りもようやく落ち着いてきた。どうやら私は今、うつ伏せで倒れているらしい。周りの状況を確認しようと、未だに自由が利かない身体の首だけを辛うじて右に動かす。
そうやって何とか見えた視線の先では、今まで私が載っていたトラックが横倒しになって炎上していた。その周りには、先程まで同じ荷台に居た男達が、おもちゃ箱をひっくり返した時のように散乱している。ここからでは生きているか死んでいるかも分からない。
攻撃の予兆は無かった。とすると、罠か地雷か…。対人地雷には、トラックが横倒しになる程の威力は無い。とはいえ対戦車地雷だったら、今頃私は肉片になっているだろう。となると、路上か路肩にワイヤーか何かで起爆させる爆発物が、恐らく戦車砲弾やらに爆薬を取って付けたＩＥＤ（即席爆弾）の類いが設置されていたのかも知れない。もしくは、榴弾砲による遠距離砲撃か。
「――――だ！――――――!!」
「――――の――――こうげき――――!」
連続的な銃声に混じり、悲鳴と怒号が反響する。恐らく、罠による初撃が成功した王国軍が総攻撃を始めたんだろう。まぁセオリー通

りだ。攻撃を免れた反政府軍兵士達が辛うじて反撃するもその攻撃は散発的で、奇襲で車列を分断されたのか部隊間の連携すら儘ならない。

完璧な待ち伏せからの奇襲の場合、大体は二つに一つの結果となる。防御側が即座に大規模な反撃を行い攻撃側を挫くか、一瞬で総崩れとなった防御側が掃討されるかだ。今の場合、どう考えても後者だろうなぁ…。

この部隊は全滅だ。未だに痛む頭の片隅で、私の冷徹な部分が何の感慨も湧かずにそう判断を下す。最も、私は今その全滅するほうに居るのだから、こうやって寝てる場合でもない。

目の前の右腕を無理やり動かし、腰のポーチを探る。指一本動かすだけでも鉛の様に重いが、だからと言って動かさない訳にもいかない。そうして、ポーチの中身を地面に撒き散らしながら取り出したのは、七耀教会製の薬品〈ティアの薬〉。

「……っ…はぁー…」

最後とも思える力を振り絞って薬を使う。

…流石は教会製、先程まで全く言うことを聞かなかったのが嘘の様に、ある程度走れる程にまで回復する。内臓や頭の痛みも、全て治まってしまった。

後は動くだけだ。少し離れた所に落ちていたライフルをそっと手繰り寄せ、気付かれぬよう周囲を伺う。

「よし……今っ！」

銃声や着弾音のタイミングから射線を推測し、こちらから注意が逸れた瞬間、全身に力を込めて跳ぶように立ち上がりながら猛然と走る。車列付近は、恐らく両側から狙われてキルゾーンになっている。だから、生き残りたければ道路から外れるしかない。目指すは、道路に面している無事な家屋。

「――――――!!」

次の瞬間、重く連続的に響く発砲音と共に足元の敷石が細かく弾け飛んだ。私は一瞬驚きながらも、脚までは止めない。

そのままタックルするように、二階建ての民家跡の窓を突き破って

中に入る。高そうな絨毯の上をゴロゴロと転がる私、直後に飛び込んできた来た大量の銃弾の嵐によって、棚の食器やワインボトルが次々と破砕されてゆく。これはどうやら…導力重機関銃に目をつけられたかもしれない…。

「火薬式のやつがあれば…」

屋内を荒らす弾丸によって身動きが取れず、窓の横の壁に背を着けながら忌々しそうに呟きが漏れる。

発射炎から確認した限り重機関銃は、道を挟んで２００アージュ先の建物の屋上にある様だ。その距離にある機関銃相手に、このお古のライフルで対抗するのは正直キツい。威力と射程距離に優れる火薬式ライフルだったら、６００～８００アージュ先まで制圧射撃を届けられるのに…。

導力銃は総じて、火薬式より威力や火力、銃口初速が劣る。銃口初速が劣るということは、射程距離が火薬式よりも短いと言うことだ。今回は潜入ということで、怪しまれぬよう導力式を持ってきたのが悔やまれる。

「…無いものねだりしてても、仕方ないなぁ」

取り敢えず今は生き残ることだけを考えよう、うん。

ならば、あの機関銃は無視する。気を取りなおした私は、壁際の窓からの死角を伝い家屋の反対側に出て、休む間もなく素早く左右を伺い、近くの導力車の残骸に身を隠した。

「さて、と…3時、距離９０に敵分隊。」

癖になっている状況報告を小声で呟くと、車のボンネットにライフルを乗せて安定させる。

道の向こう、大体９０アージュ先で王国軍の兵士数人が、土嚢に身を隠しながら重機関銃と対戦車砲で射撃を行っていた。射線から推測するに、車列中央部にいる反政府軍の生き残りと戦っているのだろう。

なら好都合、せいぜい引っ掻き回しますか。

リアサイトのゼロインを１００アージュにセットする。分かりやすく言うと、彼我の距離が１００アージュの時に最も正確に狙えるよ

う、照準器を調整したのだ。このライフルは０から５００アージュまで、５０区切りで調整できる。
「総合的に脅威度が高いのは…重機関銃。」
見える敵に優先順位を決定してから、最も危険と判断した重機関銃…の射手に照準を合わせる。狙うのは、的の大きい胴体。２００アージュ以内の射撃だ、風向きは無視して構わないだろう。
そのままゆっくりと引き金に指を掛け……発砲。
肩を小突かれるような反動と共に、軽い破裂音が響く。視界の先では、恐らく油断していたであろう重機関銃の射手が、呆気無く崩れ落ちた。よし、当たった。
「よし、気付かれる前に…出来る限り減らす。」
川に流れる落ち葉の様に、滑らかに銃口をずらす。同じく流れる照準が次の敵、対戦車砲の射手と重なった瞬間、もう一度引き金を引く。その敵の上半身辺りから、赤い飛沫が上がった。
ここまでは順調だった。だが、次の敵を狙おうとしたその時。
「…やばっ。」
敵の目が一斉にこちらを向く。直後にやって来たのは、反撃の砲火だ。幾多もの火線が車の残骸に火花を散らし、レミフェリア産チーズの様に穴だらけになってゆく。
私は刷り込まれているかの様に、反射的に身を隠したえ。まぁ、刷り込まれたというか、もう体が覚えているというだけなんだけど。
そのまま車の影から、ライフルだけを上に突き出して適当に発砲する。無論、こんな適当な盲撃ちで当たるとは思っていない。ただの気休め…と、少しの牽制だ。
「ここで使うはずじゃなかったんだけど…ねぇ」
そう呟き腰のベルトより取り出したのは、直径６リジュ、長さ３０リジュ程度の、釣り糸に付ける重りのような形をした金属製の物体…ライフルグレネード弾だ。別に取り出した円筒形のソケットをライフルの銃口にはめ込み、それにライフルグレネード弾を挿し込む。
ライフルグレネードは、平たく言えばライフル発射時の圧力で榴弾を遠くに飛ばす、というものだが、残念ながらそこまで普及していな

い。やっぱり、手間がかかるからだろうか。
さて、ライフルグレネードを用意したのは良いが、敵の攻撃が激しく狙えそうにない。ちょっとでも頭を出したら、私がレミフェリア産チーズになるだろう。いや、リベール製トマトジュースかな。
さて、どうしたものかと思考していると。突然の叫び声と同時に、こちらを狙う弾の数が一気に減った。
「――――!!」
「――――!?」
その隙をついて、頭を半分だけ出して様子を伺う。今まで私に攻撃していた敵達は、先程まで狙っていた車列の方に再度攻撃していた。
恐らく、私が重機関銃と対戦車砲を無力化したおかげで、そこの攻勢が一時的に弱まったのだろう。反政府軍部隊の残党はその弱まった所に対して戦力を集中、包囲網を食い破るつもりなのかもしれない。
……計画通りだ。
突然の反撃によって追い詰められた敵が、もう一度対戦車砲を使おうとしている。
「…そうは、させない。」
車の横から出て膝立ち、銃床を脇に挟む形でライフルを構える。距離９０アージュあたりなら、角度はちょっと上向き程度。風速、風向…無視する。
狙うは対戦車砲の横、そこに積まれた砲弾ケースだ。
ゆっくりと引き金に指を掛け、発射。間の抜けたクラッカーの様な音と共に、ライフルグレネード弾が飛び出す。僅かに上向きに発射された弾は、緩い放物線を描いて飛翔。まるで吸い込まれるかの様に、砲弾の納められた木箱に着弾、爆発。成型炸薬弾の爆発は、中の砲弾をいともたやすく誘爆させ、あっというまに対戦車砲を陣地ごと吹き飛ばした。
爆発によって破壊され、黒煙を上げる陣地を踏み越えて一気に突撃

する反政府軍の残った兵士達。一箇所が破られた包囲網は、そこから続けざまに瓦解してゆく。その連鎖は瞬く間に戦場に広がり、敵味方入り乱れての混戦に発展した。

「はっ…はっ……！」

それを横目に、私は戦場を走り抜ける。この場所から抜け出すには、両軍が混乱している今しかない。大体の予想で広い駅前通りを避け、その脇にある裏路地に滑りこむ。

「――――まずっ！」

しかしタイミングの悪い事、１０アージュ程奥の曲がり角から王国軍兵が数名現れた。

「な……!?」

「敵か!!」

敵にとっても予想外の遭遇だったのだろう、そのか顔には驚愕の表情が浮かんでいる。

ならば、やられる前にやる。左足を前でつっかえさせて右膝を曲げ、腰を落として自分に急制動を掛ける。そのまま勢いでライフルを肩着けで構え、発砲。先頭に居た敵が、一瞬痙攣し力なく倒れた。それを見て、後ろに居た敵達が一斉にこちらを狙う。

「やっぱり無茶…！」

引き戻した左足で地面を蹴りつけ、横にある金属製のゴミ箱の裏に転がり込んで射線から逃れる。すぐさま体勢を立て直して膝射の構えを取ると、ゴミ箱と壁の隙間から銃身を突き出し、引き金を連続して引く。悲鳴が響き、敵が一人倒れた。しかし、残りは全員が角に隠れてしまい、ただ銃弾が壁に穴を開けただけで終わる。

それに構わず撃ち続けながら、物陰から猫の様に飛び出して走る。手近な裏口から屋内に走りこんで、軽く室内をクリアリング。一瞬のうちに問題ないと判断し、一気に階段を駆け上がり二階へ向かう。

「よーし、ここだったはず。」

二階の隅にある窓に近寄り、一気に開け放つ。その真下に居るのは、先程の敵兵達。建物の中を通り、敵の頭上に回りこんだのだ。これが市街戦だ。

窓から身を半分乗り出して、真下にライフルを続けざまに数射する。敵も応射しようとするものの、その前に私の銃弾によって倒されていく。反撃の隙を与えるつもりは無い。
数秒後…ライフルの弾が切れるころには、眼下で動くものは無くなっていた。
ふと気が付くと、辺り一帯が静寂に包まれていた。今まで響いていた銃声や怒号が嘘の様に消え去り、ただ風の吹き抜ける音だけが耳に届く。見渡す限り生きている者は存在せず、在るのは死体か残骸のみ。両軍が全滅、壮絶な引き分けだ。
「虚しいなぁ…。」
自分でこの状況を創りだしておきながら、手前勝手にそう呟く。まぁ、どう感じるかは自分の勝手だし、思うのは自由だろう。それよりも、これからどうするかだ。
街の外れ、荒涼とした大地に一本の道が続いている。
ここから先は敵の勢力圏、サンタ・クララ市があるのはここから大体７００セルジュ先。作戦開始まで１６時間３０分。…随分長い一日になりそうだ。

---

窓から差し込む風に目が覚め、私はベッドの上で体を起こす。辺りはまだ薄暗く、月明かりが静かに景色を映し出す。
…何か、懐かしい夢を見ていた気がする。
時計はまだ４：３０を指している、しかし、もう眠れそうにない。
「…虚しいなぁ」
私の呟きは、静かに部屋の中に溶けていった。

# 幸せな自分

１２０４年４月１７日
トールズ士官学院　Ⅳ組教室・・・

「起立、礼！」
教室に響くクラス委員の号令。
入学してから二週間弱、武術訓練やクラブ活動等が始まり、学院生活も本格的になってきた頃。
「…ついに、自由行動日だ～っ！」
ホームルームが終わり担任教官が教室から出て行くと、前の席に座っているコレットが身体を伸ばしながら開放感にどっぷり浸かった声を出す。
「あーそういえば、そんな日もあったねぇ。」
私も、腕や首を軽く動かして硬くなった身体をほぐしながら、そう返す。
自由行動日…月に何回かある「お休み」の日。士官学院としての体裁上休日という扱いではないが、授業も行事も無く、過ごし方は個人の自主性に任せられている、との事らしい。学習やクラブ活動に勤しむもよし、帝都に行くもよし。要するに、事実上の休日だろう。
コレットは前々からこの日を楽しみにしていたらしいけど、何をするんだろうか…は、大体予想できてしまう。まぁ、コレットだし。
当のコレットが、椅子に座ったまま身体をこちらに向ける。その表情は笑みに満ちており、キラキラしたオーラが溢れている。
「明日はトリスタでショッピングしまくるよ♪」
予想通りだった、いや、考えるまでも無かったような。
「まー良いとは思うけど、程々にね」
呆れたような声で返すものの、正直私には明日の予定すら無い。むしろ、休日の過ごし方が下手だ。前の仕事では各地を飛び回っていたから、はっきりとした平日も休日も無かった。時間が空いたら訓練か武器整備。

コレットは買い物に行くらしいけど、私はまたちょっとした訓練と、あまり意味のない武器整備で1日を浪費するだけだろうなぁ。あ、学生だし勉強しようか。
「大丈夫大丈夫！ねぇねぇ、リーリャも一緒に行こうよ」
椅子から身を乗り出し、顔を近づけてそう提案してくる。その表情は、毎日が楽しそうって感じのいい笑顔だ。
「…オーケー、私が荷物持ちの役ってことかな？」
「うっ…そ、そういうつもりは無いけけど…アハハ…」
即座にコレットの笑顔が引き攣る。コレットのことだから本心ではなくとも、2割くらいはそう考えていたのだろう。苦笑いで濁しているコレットは、なんとも白々しい。
でもまぁ…友達と一緒に遊びに行くのは、多分凄く楽しいんだろうなぁ。
「まぁ、別に重要な予定も無いし。うん、良いよ、行こ」
「ホント？やった！あー、早く明日にならないかな～」
私の返した了承の意を受けて、満面の笑顔を見せて喜ぶコレット。掛け値無しに、この子は笑顔がよく似合うと思う。そういった所はやっぱり羨ましかったりする。
そう楽しそうにしているコレットの背後に忍び寄る、一つの桃色な影。
その影はコレットの真後ろに立つと、静かに両手を構える。そして、間髪入れずその両手が一閃――
「――――えいっ」
コレットの両脇に侵入したその両手は、それぞれの指をフルに動かして脇を蹂躙する。…所謂「コチョコチョ」だ。
「ひゃっ！あわ…ま、やめ…っ…ハハハ！」
突然脇に手を突っ込まれ、くすぐったさに身を捩るコレット。
「あ、もうヴィヴィったら！またそんなこと！」
自分の用事を済ませてからこちらに来たリンデが、駆け寄りながら非難の声を上げる。コレットをくすぐっていた手の主――――ヴィヴィは、それに対し「ただの挨拶よ」と冗談交じりに返した。

「で、なになに、何の話？」
「んー、明日の自由行動日に何するか～、って」
「ふーん、なるほど。そういえば明日は休みだったわね」
今更思い出したかの様に返すヴィヴィの様子は、ついさっきまでの私と同じような気がした。つまり、何も予定が無いと。
「はぁ…はぁ…不覚をとったよ…」
「はいはい、しっかりする。私とコレットは、ショッピングにでも行こうと思うんだけど」
脇を押さえて荒く息をするコレットを傍目で見ながら、リンデとヴィヴィを遠回しに誘ってみる。というかコレットって、くすぐりに弱かったのか。
「特にやることも無いし…そっちに行こうかしら」
ヴィヴィは頬に人差し指を当てて少しの間考えると、うん、と一回頷きながらそう返す。さて、明日はどんなイタズラがコレットとリンデを襲うのだろう。
「私はクラブ活動の方に…えーと、実技テストの対策とかって、しておいた方がいいのかな…？」
ヴィヴィとは反対の頬に指を当て、考えるような仕草のリンデ。
「えっ？」
突然、話を聞いていたコレットが素っ頓狂な声を出す。
「えっ？」
リンデもそれに反応したのか、同じ疑問の声を返した。
「実技、テスト？」
「え、はい…そうですけど」
「えっ、もうそんなのが…」
どうやらコレットは、実技テストの事を把握していなかったらしい。大方、ショッピングのことで頭が一杯だったりとかしたんだろうなぁ。
確かにあの実技担当、サラ・バレスタイン教官の性格から言えば、そこまで真面目にやっていなくとも大丈夫そうだとは思うけど…
「そういえば、ホームルームの時に教官が話してたわね」

「コレット、明日の事考えてて聞いてなかったっぽい？」
「…うん、全く聞いてなかったかも」
ヴィヴィの言葉の後に、私はそう核心を突っついてみた。
それに対して少しの間を置いて返すコレットの表情は、「ゴゴゴ」と効果音が付きそうなくらいには真に迫っている。
「アハハ…来週の水曜日です」
なんとも言えないように苦笑いを浮かべていたリンデが、改めてテストの日を伝える。
コレットは慌ててスカートのポケットより生徒手帳を取り出すと、パラパラとめくってから手早くメモを取った。
「水曜日水曜日と…うん、ありがと～」
メモを取り終えた手帳を元のポケットに仕舞い、満面の笑みを浮かべながらお礼を言うコレット。
スカートのポケットに手帳を入れておくと落としそうになるから、私は上着の方に入れてるんだけど…まぁ、それは別に人それぞれかな。

---

「――――それで、運動部に入ってみようと思うんです」
向かいのソファーに座るモニカが、会話の流れに乗りながらそう切りだしてくる。
私たちは教室から出た後、同じ2階の階段側にある談話スペースへとやって来ていた。Ⅳ組女子メンバーだけではなく、丁度同じタイミングで教室から出てきたモニカと、偶然談話スペースに居た1年Ⅴ組の女子生徒、ロジーヌも加わった。
今は、私が何気なく振ってみたクラブ活動についての話題になっている。
「運動部といえば、ラクロスにフェンシング、水泳…」
「水泳部、ですか？」
「うん、水泳部」

何の気なしに運動部を列挙していくと、聞いていたモニカは「水泳部」に反応してきた。水泳部に入るつもりなのだろうか、斜め下に視線を落として色々考え事をしている仕草が見て取れる。
「確か、ギムナジウムにプールがありましたね」
綺麗な姿勢で座っているロジーヌが、たった今思い出したかのような声で言う。
「もしかして、水泳が得意なの？」
その隣に座っているコレットが、興味深そうに尋ねた。
「いえ…どちらかというと苦手です。泳ぎ方が分からないというか…」
「泳ぎ方、かぁ」
それは確かに。泳ぎ方はいろいろあるが、見ただけでさあ出来るかといったら難しいし、言葉で説明するのも少し無理がある。かく言う私の泳ぎも、取り敢えず前に進めれば良いと手足を動かしているだけだったりする。
「あ、わかります。私も水泳は得意じゃないので…」
リンデが顔の脇で小さく手を挙げながら、モニカに同意する。
「でも、リンデの水着姿は良いものよ～」
「なっ…もうヴィヴィ、からかわないでっ」
その横から、イタズラっぽい笑みえを浮かべたヴィヴィが割り込んできて、リンデの肩に頭を乗せた。
なんだろうか、もう見慣れたこの桃色シスターズのスキンシップを見ていると、猫のじゃれ合いを思い出す。
リンデの腰に手を回し脇腹をツンツンしているヴィヴィに、それを払おうとするリンデ。リンデの方も本気で嫌がってはいない感じだし、ヴィヴィも一応の節度はある様に見える。…やっぱり仲いいなぁこの姉妹。
だがしかし、普通に可愛い桃髪女子二人がじゃれ合う姿は、士官学院入りたての純粋な男子生徒にとっては色々とアレじゃないだろうかと思う。ほら、たった今カスパルがこっちを見ないように目を逸らしながら通り過ぎた。それに、ニット帽の平民生徒は見ない振りをし

ているものの、視線はこちらに向いている。
「…それで、皆さんはどこに入るつもりですか？」
姉妹のスキンシップがひと通り落ち着いてきたところで、モニカが切り出す。
「私は今のところ考えてないかな～」
「コレットと同じく」
コレットが頭の後ろで手を組みながらそう返し、私もそれに乗っかる。残念ながら、自分がクラブ活動に精を出している姿が想像できない。人生経験薄っぺらいのかな。
「部活には入らずに、課外活動の方をと」
「特に決めては無いけど…園芸部とか良さそうね、部長が」
「私は、美術部に入ってみようと思ってます」
それから順にロジーヌ、ヴィヴィ、リンデと後から続く。
「園芸部に美術部…なるほど。」
顎に手を当てて考え込むモニカ。取り敢えず、そんなに深く考えこまないでも良いんじゃないかなとは思うものの、それを口に出すのは責任感が無さそうな感じがするので止めておく。
そんな雰囲気のガールズトークが続いて何分か。
「あ、私そろそろ美術部の方に行かなくちゃ…」
話し込んでいたリンデが、我に帰ったように辺りを見渡しながら立ち上がる。
「私も、取り敢えずギムナジウムに行ってみようと思います」
「なら、園芸部の部長さんでも見に行こうかしら♪」
その後に続くように、モニカとヴィヴィも席を立つ。というか、結局ヴィヴィは園芸部志望なのだろうか、それとも噂の園芸部部長にイタズラしたいだけなのか。…まぁ後者な気がする。
「私は教官に、課外活動の許可を取りませんと」
ロジーヌもそう言って立ち上がる。課外活動…確か、ロジーヌは教会のシスターを目指していた筈。…ロジーヌに限らず、コレットもモニカも桃色姉妹も、なんで士官学校に入ったんだろうか。

「また明日～…コレットはどうするの？」
　そうして皆が各々の場所へと去った後、大分スペースの空いた談話スペースのソファから腰を上げ、隣に座っていたコレットの方に首を向ける。
「私は図書館に行くつもりだよ。リーリャは？」
「んー…ちょっとした用事があるんだけど、まぁそこまで時間はかからないかな」
　私も、この後に行かなければならない所がある。私の事だ、その用事が終わったらそのまま寮に戻ってしまうだろう。
　まぁ、それが普通なんだろうけど…
「だからコレット…一緒に帰ろう。」
　コレットの正面に立ち、意を決して、そう言う。
「え……？」
　急な私の申し出に、呆けた表情をみせたコレット。
　学院から寮までそんなに距離は無いし、コレットとは寮内でも普通に会うことができる。その上、私はこの後用事を済ませるために商店街まで足を伸ばす。そこからならわざわざ学院に戻るより、直接寮に帰ったほうが断然早い。つまり、私の考えていることはまったくもって無駄な事だ。
「こう…私から誘うのって初めてだったよね？それとも…都合悪かった…？」
　それでも、ここで何も無しに別れてしまうのは…駄目だ。
　自分で言うのも何だとは思うが、私とコレットは仲が良い。まだ入学から2週間弱しか経っていないが、クラスの皆から「コレット&リーリャ」と思われているだろう位の自負はある。
　しかし、それはあくまでコレットの社交性に助けられたものだ。コレットは、比較的ドライであろう私にも笑顔で話しかけてくれる。コレットが私にボールを投げ、私はそれを受けるだけ。そんな一方的な関係。それは、ちょっとしたことで壊れてしまうだろう。
　せっかくの学院生活だ…こんな私でも、ちゃんと友達を作りたい。
「…ううん、良いよ。一緒に帰ろう！」

「……うん！」
コレットが、人懐っこい笑顔を見せる。何気ない一言だが、私にとっては紛れもない女神の祝福だった。

---

同日　１７：２１

「……来たか。」
カウンター奥の椅子に座り、新聞に顔を向けたままそう言うのは質屋の店主、ミヒュト。その態度は相変わらずのぶっきらぼうで、人を選別し、結果的に客の信頼性を上げているのだろう。
「頼んだものと…情報は？」
ここで各種弾薬と情報を注文してから一週間。弾薬の特殊性と必要な情報の広さから、商品の「受け渡し」には数日程度の時間が必要だったらしい。まぁ、あの弾薬を普通に用意できるだけでも只者ではないんだけれど…。
「注文通り．７６２×５．１リジュ装薬弾が２４００発に、４リジュグレネードが６４発だ。全く、面倒なもん注文しやがって…」
そう言いながら目線で示す先には、「２００ＣＲＴＧ．７６２ｌｇ　ＡＭＭＯ」と刻印された金属製の箱が１２個に、「３２ＣＡＲＴＲＩＤＧＥＳ　４１ｇ」と書かれた少し大きめの箱が２つ、店の端に積まれていた。
私はゆくっりとその箱に近寄り、上にある箱の一つを開ける。中には、火薬式であることを物語る様に輝くライフル弾が詰め込まれている。
薬莢は真鍮製。弾頭は、鉛の弾体を真鍮で覆ったフルメタルジャケット弾。導力銃が出てこなかったらこれが普及していたであろう、標準的な装薬弾だ。
「で…肝心の情報は？」
弾薬箱の蓋を閉めると、私は唐突にそう切り出す。今回の主目的は、むしろこちらの方だ。

「あぁ…信頼できる情報から言えば、カイエン公爵に雇われたらしい二人組だな。」
カイエン公爵…たしか、帝国西部ラマール州一帯を勢力圏とする、帝国貴族四大名門の一つだったかな。報酬的にはそこらの武装集団や自治州よりは断然良いと思う。
それで、その二人組だけど…特徴から推測すると、多分〈罠使い〉ゼノと〈破壊獣〉レオニダスだ。それと、クロスベル自治州のマフィアに一人…こっちはあの熊オジサンだろう。すでに会っている。
有力な情報といったら、それぐらいかな。
あとは、全て信頼性の無い噂のようなものばかり。偶然にも帝都とかバリアハートらへんの近くに居た、とかの奇跡は期待できないだろう。そもそも、ここらに猟兵の求める仕事は無いのだから。
取り敢えずは、今度予定を立ててゼノとレオニダスに会いに行こう。それで、離散してからの経緯や現在の状況なんかの情報を共有する。それに、他の団員の居場所も。もっとも、こっちに関してはあまり期待してないけど。
「…ありがと。」
ミヒュトに礼を言い、店を出る。弾薬類は、外見を偽装したうえで後日寮に届けてくれるらしい。
…今回は有益な情報を得られた。ひとつ心残りがあるとすれば、〈西風の妖精〉フィーの居場所が分からなかった位、かな。今年で１５歳だった筈…ちゃんと生き方は見つけられたかな？…その前に生活できてるんだろうか…？料理とか、洗濯とか、資産管理とかその他色々…はぁ。
ま、フィーの事だし、こっちの心配も知らずに、飄々と生活してたりするんだろうなぁ。
「…さて、コレットを迎えにいかないと」
私は、学院を目指して歩き出す。
この大陸は広い。そして、〈猟兵王〉と呼ばれた団長の、その求心力を失って離散した〈西風の旅団〉には、今のところ再結成の予定も無い。だから、フィーとはもう会うことは出来ないだろう。痛む心を無

視し、冷静な頭が下した結論だ。私には、フィーが人並みの幸せを得られるように祈ることしか出来ない。

私には最近友達が出来た。だからフィーも、新しい仲間に囲まれながら笑えてればいいな…なんて。

# 無力

七曜歴１２０４年４月１７日
トールズ士官学院　図書館

日が大分傾いてきて、足元から出ている影も伸びきった頃。
「あれ…うそ…無い!?」
読書や自習等で残っていた生徒がそろそろ帰り始め、だんだんと人が疎らになってきた図書館。そのカウンターの目の前で、とある女子生徒から悲痛な叫びが上がった。
「……？」
その声に、階段脇の時事コーナーで帝国時報をパラパラと見ていた私は、雑誌のページを捲っている指を止め顔を上げる。
「んー…何、どうしたの？」
クロスベル方面の時事が取り上げられていた、読みかけのページを閉じると棚に戻して、今の悲鳴の主…呆然とつっ立っているコレットの側に近づく。
「な、無いの……」
首をこちらに向けると、可哀想な程に顔を青くしながら、震えた声を絞り出すコレット。
「えっと…何が？」
話を流れに任せて出た私の疑問、それに答えたコレットの言葉より、この騒動は始まった。
「……生徒手帳」

「とりあえず…心当たりとかはあるの？」
ひとまず図書館から出た私達は、昇降口前で作戦会議を始める。

「確か、スカートのポケットに入れてたんだよね？」
「うん…さっき教室で使ったから、それより後なのは絶対だよ…」
普段の明るく元気な様子からは全く想像できない、暗い雰囲気を纏ったコレットは表情を俯かせ、視線は地に落ちている。
「となると、本校舎と図書館…」
「それと、生徒会館と…もしかしたら外に…」
要約すると、校内のほぼ全てらしい。
「……うーん、地道に探すしか無いかなぁ」
何の気なしに上げた右手が頭を掻く。
とは言っても、校内くらいなら総当たりで何とかなるだろうし、ま、やりますか。
「本当にゴメン、こんなことに付き合わせちゃって…」
そのシュンとした声で、こちらに向き直って、小さく頭を下げる。
あー……そんな顔はコレットには似合わない。
「いーよ、こんな時くらいドンと頼ってくれて……いつも私が頼ってばかりだし、ね」
なんでだろうか、さり気なく、小さく、ささやかに呟いてしまった。しかし、これは私の本心だ。
ここに入学してから私は変わったのかもしれない、と心の中で小さく思う。とはいっても、まだ2週間ちょっとしか経ってはいないけど、心なしか前より笑顔でいることが多くなった気がするし、クラスメイトともよく話せるようになったと思っている。
眠りに就く時も、明日の事が頭に浮かび、自然と表情が緩んでいたり。
これが、毎日が楽しいっていうことなのかもしれない。
もしかしたら私は、そんな日々を私に与えてくれたクラスメイト、私を楽しい日々へ引っ張ってくれたコレットに、何と言い表していいか分からないくらいの気持ちを抱いているのだろう。
「え……？」
……少し恥ずかしくなってきた、コレットの顔を見れない。
視線を遠くに逃がしながら戸惑う表情を隠すように、飄々とした雰

囲気を見せておく。
「んー、何でも無い。それとも、私じゃ頼りないかな？」
ここら辺で私が、もうちょっと素直になれればどうなるんだろうか。いや、今は止そう。恥ずかしさでモヤモヤする。
「……ううん、とっても心強いよ！」
返ってきたのは、コレットの明るい普段の、いや、それ以上の弾ける笑顔。
なんの邪心も無いだろう、人を惹きつける魅力を持つそれは、とても眩しく感じる。
「……まぁ、そうと決まれば善は急げ、と。私は生徒会館の方を探してくるね」
くるりと踵を返すと、足早に出入り口へと向かう。
ダメだ、振り向けない。
多分、小さく笑みが零れている。今振り向いたら、変なにやけ顔を見せることになりそうだ。
どうやら私は、素直な好意を向けられる事に免疫が無いらしい。

校舎正面から見て右隣、図書館の手前にある三階建てのそれが、生徒会館だ。
食堂と購買、それからいくつかの部活動の部室が在るらしいが、私は食堂を少し覗いたことがある位なので詳しい事は分からない。
流れに任せて来てしまったものの、いきなり躓きそうになってきた。まぁ、やれるだけやってみるしかないだろう。
「とはいうものの……」
だいぶ日は傾いてきたとはいえ、未だ食堂を利用する生徒は多く、大っぴらに探すことは難しい。
分かりやすい所に落ちているならば、既に誰かが拾って届けているだろう。
拾った上で届けない、という想定もあるが、そこはコレットだ。そんな悪意を受けるような事は無いだろうし、その様子も見受けてはい

ない。
「とりあえず、上の方も見てみようか、と」
購買部の脇を通り過ぎ、階段を上る。二階は確か、文化部の部室が入っているフロアだったはずだ。
部活といえば、リンデは美術部、ヴィヴィは園芸部に興味がある、と言ってたっけか。私とコレットは未だ所属するかどうかは決めていないけど、こういったものに参加するのも、猟兵としての生活しか知らない私にとっては、まぁ、有意義なことなのだろう。
と、そこでもう一フロア上階があることに気がついた。
「赤絨毯…？」
そこには、生徒会館という名前に似つかわしくない、高級そうな絨毯が敷かれている。
この色は、エレボニア帝国の国旗である黄金軍馬旗に使用されている赤と同じ、帝国を象徴するものだと思うが……
「待ちたまえ。」
後ろから声をかけられた。
振り返ると、そこに居たのは3人の白制服、貴族生徒だ。
その3人の中で中心人物らしい中央に立っている生徒が、こちらを一瞥してやれやれと呆れた様子を見せる。
「そこから先は我々の専用サロンだ、平民は立ち去りたまえ。」
サロン、とは貴族やらお偉いさんやらが集まって社交的な談話を行う事、だったはずだ。ともすれば、私のような出自の知れない平民がおいそれと覗ける所ではないだろう。
「あぁ…なるほど」
なんとも納得のいく答えを示されて、ついつい間の抜けた返事を返してしまった私。
それが気に入らなかったのか、貴族生徒の一人が前に出る。
「貴様！ハイアームズ侯爵家のパトリックさんがご忠告されているのだぞ！」
「ハイアームズ侯爵家って、あー…四大名門だっけ？」
どうにも金持ち相手は苦手だ。我ながら、自分の態度でその雰囲気

が溢れ出てる気がする。
それが気に入らなかったのか、もう一人の貴族生徒もすかさず口を開く
「なっ……その態度は！平民の分際で、無礼者め！分を弁えよ！」
どうしたものか。
とりあえず、この手の相手には機嫌を取りながら媚びへつらっておくのが最適解だろうか。
無意識に横髪を指先で弄る。
謝罪を口にしようとした時に、真ん中に立っていた貴族生徒…パトリックだったか…が取り巻きを手で制した。
「貴様、名を答えるがいい」
「……リーリャ・マルセイユ」
何かあるのか、とくに何をするでも無く、名前のみを簡潔に言う。
それを聞いたパトリックは、納得したかのように口角を上げて、目を細め
「ほぅ、貴様が。あのクロスベルからの留学生か」
そう、嘲笑した表情で言った。
雰囲気が変わった。
「敵国にすらへりくだる、金に塗れた魔都の民ならば、教養も、気品も全く感じられないのも納得だ。」
取り巻きの一人が水を得た魚の如く、嘲り捲し立てる。
「卑しい属州民め、己の身分を弁えるがいい。」
もう一人も前に出ると、高く伸びきった鼻が見えそうな態度で威圧する。
私の場合、クロスベル籍は利便性から取っているだけで、本来の出生地ではないのだけれど…
「もう良いだろう、行くぞ」
そのまま、3階へと消えていく貴族生徒達。
一時期だけとはいえ、自分の住んでいた所を悪く言われるのは気分が良いものではない。
「……。」

帝国の貴族という存在は、あくまでも共和国の資本家連中が良い血族を持っているようなものだと考えていたが、どうやら少し違うらしい。
全ての貴族がこのようなものなのだとしたら、認識を改める必要がありそうだ。
なんにせよ、帝国の身分制度は予想よりも厳格で、そして根深いのかもしれない。
「クロスベルって、そういえば属州扱いだったっけか」
そうだとすれば、クロスベル国籍の私は、この国における身分は限りなく低く見られるのだろうか。正直、帝国国民の身分に対する意識がよくわからない。
ただ、今はまだ周囲に対して、私の身分は伏せておく。そんな考えだけは、確実に固まっていたと思う。

2時間後…
本校舎前、広場
赤く色づいていた日が落ちて、トリスタ全体が夜の帳に包まれていく中。
あの後、結局生徒手帳を見つけることはできなかった。そろそろ門限も近い。私はコレットを探しに出てきて、そしてコレットも丁度こちらに来た所だった。
「……ごめん、私がしっかりしてれば…」
コレットの方も、見つけられなかったらしい。会ってすぐに開いた口から出たのは、疲れと落胆を滲ませた雰囲気に相違ない、そんなものだった。
「ミスは誰にでもある。仕方ないよ。」
大丈夫、きっと見つかる。とは言えなかった。見つかるかどうかは

分からない、大丈夫と言うだけの何の根拠も無い楽観論。
そんな無責任なことは言いたくなかった。
「うん…」
気を落とすコレット、私は見ているだけ。
こんな時、どんな言葉を掛けたら良いのだろうか。無責任な楽観論にすがるべきだったのだろうか。
私はコレットのことを重要な友人と考えているけど、コレットは私のことを、使えない人材だと思っているかもしれない。
「…仕方ないから生徒会に依頼してみるよ。一緒に探してくれてありがとね、リーリャ」
コレットはそう、ぎこちない笑顔を私に見せる。
あのコレットがそれを言うことはないだろう。けど、しょんぼりと前を歩くコレットの背中を見ていると、そんな考えが浮かんでは消えていく。

生徒手帳は結局、翌日に生徒会の依頼を受けたⅦ組のリィン・シュバルツァーという男子生徒が見つけたらしい。
手帳が見つかって喜んでいるコレットを見ていると、喜ばしい筈なのに、ふと、複雑な思いが感情に混じる感覚がする。
……私にはそれが何なのか分からない。

# 準備期間

１２０４年４月１８日　朝

自由行動日。

普段は学生たちが朝早くから慌ただしく動き始めるトリスタでも、今日は比較的ゆっくりとした雰囲気が漂っている。

士官学院という立場上、生徒自らが各々で決めたカリキュラムに自主的に取り組む、という建前だが、何をするのかは特に制限されていない為、実質的な休日だ。朝早くから学院、もしくは街中に出かける生徒もいれば、寮のベッドで惰眠を貪る生徒も居る。

朝早くの生徒会館。

昨日は終ぞ探し出せなかったコレットの生徒手帳だが、今朝早くに、生徒会から依頼を受けたⅦ組の生徒の協力によって無事に見つかったらしい。

それは良いんだけど・・・

「ん～♪」

そのコレットは、なんとその場でパフェを食していた。

流石である。

「・・・で、Ⅶ組のリィン・シュバルツァー、だっけ？」

リーリャも頼む～？というコレットの提案をやんわりと断固お断りしながら、テーブルの向かい側の椅子に腰掛ける。まだ朝ですよ、朝。

「そうだよー。生徒会の仕事を手伝ってるみたいなんだ～」

見るからにスウィーティーで甘そうなクリームと共に、赤いイチゴがコレットの口へと運ばれる。

「生徒会の仕事を・・・そりゃまた何というか・・・」

その様子を見て軽い胸やけを起こしそうに感じる私は、甘い物がそれ程得意ではないのかもしれない。いや、例え得意だとしても早朝パフェをかませる剛の者はなかなか居ないと思う。

こういうのを「女子力」と呼ぶのだろうか。

「でも良かったよ～」

「Ⅶ組かぁ・・・」
特科クラス、Ⅶ組。
高貴で在ることの証明か、白い制服を身に纏う貴族の子女が所属するⅠ、Ⅱ組。
士官学校らしく軍事色の強いモスグリーンの制服を着る、平民階級の生徒が所属するⅢ～Ⅴ組・・・もっとも、帝国軍の兵装は大抵青系統でカラーリングされてるけど・・・。
その両者と違う緋の制服を身に纏う彼らは、噂に聞く話では貴族、平民といった身分に関係なく選出された、いわゆる特科クラスらしい。
入学式前の列車の中でちらりと見えたあの緋は、帝国の国旗の色、皇帝の色だったはずだ。その皇帝の色を着るⅦ組とは。彼らは何のために選ばれたのか。
安心感に身を委ねているコレットを尻目に、私はしばし思考の海に浸る。
「リーリャ？」
意識の外から飛んでくる疑問に思う声。顔を上げると、こちらを見て首を傾げているコレットが目に入る。
「ん、あぁ、何でもないよ。で、今日はショッピングだっけ？」
Ⅶ組の目的が何であれ、今の私にはそこまで関係のない話だ。
今日は初めての自由行動日、こういった機会は私には貴重だ。その分、しっかりと満喫するべきだろう。この先、同じようにショッピングに出かける事ができる保証はどこにも無いのだから。

「・・・で、武器を選びたいって？」
しばらく後、コレットのスウィーティータイムが終わった後にやってきたのは、先ほどのテーブルからほんの数アージュ横。生徒会館1階の学食に併設されている購買部だ。購買と言っても、そこは帝国の士官学院。そこらへんの店でもよく見かける普通の商品に加えて、装備品や多種多様な武器まで揃っている。

剣や槍はもちろん、ショットガンや拳銃、弓、魔道杖・・魔道杖って確か最近発表されたばかりで、まだ試験途中じゃなかったっけ？
「うん。もうすぐ実技テストだし、ちゃんとしたものを選びたいんだけど・・・私だけだと決められなくて」
自信無さげな表情、両の手の平を体の前で合わせ、もじもじしている。
「リーリャは導力銃とか詳しそうだから、一緒に選んでほしいんだ」
実技テストとは言うものの、まだ入学より三週間程度。そもそもまともな戦闘訓練すらしてない。だとすれば、そのテストも恐らくは、個人の実力を測って、今後の教育に活かす為のものだろう。
とはいえ、ここは学校。もしかしたら成績を良くすることに越したことはない、のかもしれない。
「まぁ、それはいいけど・・・結局、導力銃にするの？」
「うん、お揃いだよ～♪」
天真爛漫、そう表現するのに相応しい笑顔のコレット。その笑顔に少々の眩しさを感じながら、私は購買部の商品カタログに目を通す。
その殆どがラインフォルト社製の導力兵装で占められているカタログの、導力拳銃の欄を見ていく。
「扱いやすくて、尚且つ実用的な火力の・・・」
そこで、ふと目に留まったのは、青く輝く導力シリンダーを持つ大型軍用拳銃。
「クルセイダーとか、どうかな？」
「クルセイダー？」
首を傾げるコレットの横から、購買部の店主、ジェイムズが声を掛ける。
「軍や鉄道憲兵隊で採用されている拳銃だな。うちの生徒達にもそれなりに人気の銃だ。」
「オーソドックスな性能で、威力は十分。少し重いけど、堅実な造りで使い易いはず、だよ。」
価格も大体２０００ミラ前後と、手の届かないものでもない。とはいえ、自らの身を預けるモノだから、店先で即決はできないだろう。

私は、カタログを閉じながら、店主の方に向き直った。
「試射って、できますか？」

同日　ギムナジウム
たまたま教官室に居た導力学担当のマカロフ教官から、二つ返事の訓練場使用許可を貰った私達は、射撃訓練場があるギムナジウムへと足を運んでいた。
私は初めて入ったのだけれど、コレットの方は既に何回か来ているらしく、中で迷うようなことは無かった。
「向こうにみえるのがプールで、その手前が射撃訓練場。あそこはフェンシング部、だったかな？」
「プール、といえば水泳部にはカスパル、フェンシング部には・・・たしかアランが居るんだっけ」
カスパルとアランは、共に私達と同じⅣ組の男子生徒だ。この二人は、比較的早いうちに部活動を決めていたようで、恐らく、今は両者ともに練習に打ち込んでいるはずだ。
「・・・と？」
そこで、一つの視線に気が付いた。
視線の主は、フェンシング部の部室の前、白い制服を着た女子生徒。
今この場に私達以外の人は居ないため、恐らくは私かコレット、もしくはその両方に向けられた視線だろうか。
なんとなく、思考の片隅でそんなことを考えていると、例の女子生徒から。
「あなた達は、もしかしてアランのお知合い？」
と疑問の声。
「んー、まぁ。同じクラスだけど。」
「そうだよ～、アランのクラスメイトの、私はコレットで、こっちは

リーリャだよっ。」
素っ気なく返す私に対して、コレットは笑顔のまま、そして楽しそうに自己紹介も含めた返事を返した。
「私はブリジット、アランとは日曜学校からの幼馴染よ。」
その様子に貴族の女子生徒、ブリジットからも笑みが零れる。
コレットのこういう、他人とすぐに打ち解けることができる姿勢は、もしかしたら一つの才能なのかもしれない。
「久しぶりに挨拶を、と思ったのだけれど・・・どうも立て込んでるみたいで」
そのブリジットは、フェンシング部の扉に顔を向けて、困ったような、自嘲的な笑みを小さく浮かべる。
これはあれか、もしかしたら男女の仲、というやつか。
「そうなんだ～・・・あ、それなら。私たちと一緒に試射してみない？」
どうしたものか、と思考する私を置いて、そう誘っていくコレット。
「そうね・・・折角の機会だし」
やっぱり、この社交性の高さは才能かもしれない。
満更でもなさそうなブリジットの様子を見て、私は、あらためてそう確信した。

「・・・ねぇリーリャ。明らかにアランのこと好きだよね、多分」
「・・・まぁ、挨拶に来るくらいだし、可能性は高いんじゃないかなぁ。」

射撃訓練場内。
いくつかのボードで区切られた射撃コーナー。その内一つの中、コレットが両手で導力拳銃を構える。
背筋は伸びており、右脚は半歩引いている。右腕を前に伸ばして、左腕は曲げた状態で15アージュ先の的に狙いを定める。
「・・・!」
ゆっくりと引き金が引かれる。
導力加速機構が駆動する一瞬のタイムラグの後に、金属片を叩いたような甲高い発射音を響かせながら、弾体が勢いよく射出される。
導力によって十分に加速された弾は、その勢いのまま一直線に飛翔し、的の横、数十リジュ外れた壁に火花を散らした。
「あちゃ～、また外しちゃった」
首を傾げながら、頭をかく。
どうすれば・・・と、こちらを向いた。
「そうだ!・リーリャ!・見本見せて!」
と言われて銃が差し出されたので、私はそれを受け取って射撃コーナーに立つ。
見本、と言われても・・・どうするべきか。とりあえず、的をただ撃ってみせればいいのかな。
「難しそうですわ」
「こればっかりは慣れ、としか言えないなぁ・・・」
コレットから導力拳銃を受け取ると、体は正面を向いたまま、そのまま体の真ん前に銃を持ち上げて銃口を的に向けると、両方の腕を伸ばしきらずに素早く発砲する。
バネを勢い良く弾いたような反動とともに、頭に1発、体に2発。的に描かれた人型のシンボルマークには、その通りに穴があいていた。
着弾範囲はおおよそ半径5リジュ以内。これが実戦ならば、問題なく、そして効率的に敵を無力化できる射撃だ、と我ながら思う。
「おぉ～」
コレットの感嘆の声。ちょっと気分がいい。

「凄い・・・導力銃を使う何かの武術？」
「射撃競技用の技、かな。言うとすれば」
コレットに銃を返しながら、戦いは苦手そうなブリジットの質問に返す。
・・・室内に突入してクリアリングしながら、飛び出してくる的を破壊する訓練でクリアタイムを競うこともあるから、嘘ではない、はず。
「射撃競技、なるほど」
「私もそんな風にバシバシ命中させたいなー。コツ教えて！」
コツ、と言われても・・・もう実技テストまでは数日も無いんだけど。流石に一昼一夜じゃ難しいと言わざる負えない。
うーん、と首を傾げながら導力銃を弄り回すコレット。それってセーフティは掛かっているのだろうか。
改めて考えると、私の戦闘技術は、技術というよりも大体が「慣れ」かもしれない。だから、他人に教えることが難しい。それに、そんな機会もいままで無かった。
団に居た頃は、全てを教わる立場だった。
ゼノには、効率的なブービートラップの運用と、戦闘時における心理誘導を。レオニダスには、効率的な破壊力の運用方法を。フィーからは、あの素早い身のこなしを教わった、というより盗んだ。
団長のは次元が違いすぎて参考にならなかった。同じ人間とは思えないです、はい。
と、そこで思い出す。
「確か、戦術オーブメントのクォーツに命中精度を上げるものがあったような」
「戦術オーブメントか～。そっちの方も準備しといたほうがいいのかな？」
コレットが戦術オーブメントを取り出したのにつられて、私も懐のポケットから、入学時に学院より支給されたそれ取り出して蓋を開く。
「・・・・・・・。」

戦術オーブメントは各々の適正によって、クォーツ間を繋ぐラインの構成が異なる。
高い適性を持つ人は、ラインが少なく、長い。そして、極めて強力な導力魔法（アーツ）を行使できる。
適性が低い場合、ラインは多く、1本が短い。スロットの開封は比較的簡単に行えるものの、運用できるアーツは限定的。
ラインは平均して1～4本の場合が多い。
「うーん、でも使い方がよく分からないな～」
コレットのラインは3本。平均的な構成になっている。
「そこも含めて、実技テストで習う、のかしら？」
ブリジットのラインは2本、1本目が長めのタイプのようだ。
そして私は・・・
「それはそれで初めて見たかも」
覗き込んだコレットが言葉を詰まらせる。
中央のマスタークォーツより放射状に延びるライン。上方向ののみ、ラインがもう一つ繋がっているのが、更に不格好に見える。
表記するとしたら「2―1―1―1―1―1―1」
驚異の7ライン。リベールやクロスベルで使われている属性値累積式だった場合、まともなアーツが扱えないところだった。
「・・・と、とりあえずこの銃良いね！かってこよ～っと！」
「そ、そうね。それがいいと思うわ」
何とか話題を変えようとする二人。
うん、大丈夫。知ってたから。私にアーツ適性無いの知ってたから。大丈夫。おーけー。
とはいえ、二人の心遣い。私なんかに気を使ってくれたことは、ちょっと嬉しかったりする。

射撃訓練場の片隅。壁に背を付き、腕を組みながら、ワイワイとしている女子3人を見る人影が一つ。

「・・・へぇ」

そうとだけ声を漏らすと、その人影・・・実技担当教官、サラ・バレスタインはその場を後にした。

# 実技試験

１２０４年４月２１日

よく晴れた空の下、もうすぐ昼を迎えるグラウンド。
その一角に、多数の緑制服。これから、初の実技テストを迎えることになるⅣ組の生徒達が集まっていた。
各々の手には、様々な武器が握られている。その表情は、余裕を見せている者も居れば、緊張に身体を強張らせている者も居る。
「ついにこの時が来たよぅ・・・」
隣で震えているコレットが、両手で導力拳銃（クルセイダー）を握りしめながら助けを求めるようにこっちを見ている。
とりあえず、あの射撃場での一幕から徹底して「銃は常に弾が入っている物として扱う」「射撃時以外はトリガーに指を当てない」「待機時は常に銃口を地面へと向ける」とだけ教えた為、安全に関してはある程度問題ないと言える。
「クォーツは、しっかりはまってる。よし・・・。」
一方で、射撃技術に関しては、基本的な射撃姿勢について教えたに留まっており、射撃精度に関しては照準補助クォーツが頼みの綱だ。コレットの持つ戦術オーブメントを覗いてみると、スロットの一番上に装着されている。
クォーツ自体は、今日までに合成してきたらしい。あとはこれがどのくらいの効果をもたらすか、だ。
「最初から緊張しても仕方ないし、教官達だってそのことぐらいは分かってると思うよ」
「そうかな？大丈夫かな？」
「問題ない問題ない。」
「う～ん・・・」

「うぅ…大丈夫かな」

「ふふ、ダイジョーブダイジョーブ。なんとかなるって」
隣には、最新型の武装である導力杖を携えるリンデとヴィヴィが向かい合って立っている。
導力杖は確か、使用に応じて適正が必要とされていたはずなのだけれど、両者とも同じ型式の導力杖を持っているのは流石双子というべきかもしれない。
「でも、戦闘経験なんて全く無いよ…」
「ほら、えーと。うん、ダイジョーブだって！」
不安に固まっているリンデを励ますヴィヴィ。しかし彼女も、普段のような軽薄な雰囲気は鳴りを潜めている。何時もより硬くなっているのは、隠しきれない緊張の為か。
「リーリャさんは、結構平気そうですね」
リンデがこちらを向き、導力杖を抱え直す。
正直、導力杖の柄の長さは、もう少し短めでもいいと思う。と、その様子を見て、場違いなことが頭に浮かんだ。
「まぁ、初回はそこまで大変なことはしないだろうし」
まぁ、ボコボコにはされるかもしれないけど。
ふとコレットの方を見ると、彼女は二人を、ただしくは二人の持っている武器を、興味深そうに見ていた。
「二人はどっちも同じ武器なんだね～・・・えーと、杖？」
幾分か気を取り直したように見える様子で、リンデに顔を向ける。
「あ、はい。導力杖って言って、短距離の無属性アーツが放てるみたいです」
導力杖による短距離アーツは、射程や即応性こそ銃には及ばないものの、至近距離での高い火力と阻止力を持っている。
短銃身のショットガンと火炎放射器が合わさったような攻撃は、成人男性を優に麻痺させるだけの能力があり、室内戦闘でアーツをばら撒きながら突進されれば、とても対処し辛い。
さらに、銃口が無いためどの方向に飛んでくるかがわからない。高い戦闘能力を持つ人間ならば、発射後に見切ることも出来るらしいけれど、私にはちょっと難しい。

「導力杖って、たしか適性とかいうのなかったっけ？」
私の些細な疑問に、リンデが答える。
「確か、姉妹での適正の違い、とかの話で・・・」
リンデとヴィヴィはほぼ見分けがつかないくらいそっくりな双子姉妹だ。その点は導力魔法の適正という面にも如実に表れていて、研究者的にはそれが興味深いらしい。

「コレットは、導力拳銃にしたのね」
「うん、リーリャに選んで貰ったんだ～」
コレットは自慢げに、導力拳銃を顔の前に掲げた。
「選んだ、といっても無難な選択なんだけどね」
「リーリャさんは導力ライフル、ですか？」
「そうだよ。軍が正式採用してるタイプの。」
小脇に抱えている導力ライフルを、正面に持ち直す。
私の武器は、正規軍や領邦軍で採用されている標準的なセミオートの導力ライフルだ。最新型ではないけれど、大量に配備されており、信頼性も充分高いので、未だ主力の銃となっている。
リミッターの調整次第で強力な一撃を放てるらしいけども、エネルギー消費が激しく、導力機構に大きな負担を掛けるらしいから、それを使いたいとはあまり思っていない。
「ふ～ん、珍しいもの着てるわね」
ヴィヴィの視線は、私の体に向いている。
私の腰に巻かれている太めのベルトには、複数のポーチが付いている。そこから垂直に、二本のベルトが肩を回って背中でクロスし、サスペンダーのように後ろ腰でまた繋がっている。
「・・・あぁ、チェストリグね。弾とか薬とかがそれなりに入れられる、戦闘用のポーチみたいなものだよ。」
割と新しく考え出されたもので、まだ正規軍はおろか猟兵にすら出回ってない。戦闘の達人からすれば、動きを妨げる要因になるのかもしれないけれど、私は結構気に入っている。
・・・と、ていっ。

「あたっ」
チェストリグを触ると見せかけて、両手を怪しくワキワキさせていたヴィヴィの額にチョップを叩き込む。
これで通算数回目に上っている。
リンデがそれを注意して、ヴィヴィがいなす。コレットにも笑顔が浮かぶ。
試験前ということを除けば、いつものありふれた光景。
「・・・前衛2、後衛2か～」
何の気なしにコレットの口調を真似して呟く。
先ほどから実技試験に使われている仮想敵、「T」の形をした赤い自律機械。教官が言うには戦術殻。
見た限りでは、結構硬そうだ。それに、意外と素早い。戦場で遭遇したのならどうとでもなるけども、今は学院の試験。それに味方も居る。
まぁ、惨敗だけはしないように頑張りますかな。

「コレット、リーリャ、リンデ、ヴィヴィ。前に出て来なさい。」
しばらくして、実技担当のサラ教官が私達４人の名前を呼んだ。ついに来たなぁ・・・。
人ごみをかき分けて前に出ながら隣を見ると、コレットが緊張に口を結んでいる。リンデ、ヴィヴィも同じような雰囲気だ。
恐らくまともな実戦は初めて、私がどこまでフォロー出来るかどうか。
命令を待って待機している戦術殻。その正面に私達４人が立つ。
私の隣にコレットが。その後方、十数アージュにリンデとヴィヴィが。
現状考えられる最善の立ち位置。後はやってみるしかない。

「始め！」
「リンデ、補助魔法！ヴィヴィは阻害魔法！コレットは私と一緒に敵の阻止！」
　事前の打ち合わせ通りに、素早く指示を飛ばす。
「わかりました！」
「わかった！」
「りょうかーい！」
　返事が聞こえると同時に、ライフルを構える。
　脚を開き、腰を下げ、多少前傾姿勢に。何度も繰り返し、体に染み付いた動作で十数アージュ先に居る敵・・・戦術殻のど真ん中に狙いを定め、引き金を引き絞る。
　強いバネが弾けるような反動と共に、余剰導力の発射炎が銃口から噴き上がり、訓練出力に設定された導力加速機構から弾体が射出される。弾はそのまま一直線に飛翔し、戦術殻へ命中した。
　金属のぶつかる音。
　多少動きは止めたものの、有効打となった様子は無い。
「すっごい硬いよ！あれ！」
　コレットが、少しばかり辿々しいものの、戦術殻に対して連続した射撃を行う。
「とにかく撃ち続けて！」
　私もそれに合わせて、素早く引き金を引き続け戦術殻の腹に次々と弾を送り込む。
　効いていようがいまいが、最低でも動きを止めることができているのだったら、今は攻撃を続けるしかない。私達が上手く壁となれば、それだけリンデとヴィヴィの負担が減る。
「あ、弾が！」
　コレットの導力拳銃の弾が切れ、射撃が途切れる。慌てて予備弾倉を取り出すものの、経験不足故か、その動作はスムーズとは言えない。
「っと・・・あっ」
　それをカバーする為、射撃のテンポを早める。
「カバーしてるから、落ち着いて」

制圧射撃。
これで戦術殻の動きが止まってる内に、コレットのリロードを済ませる。次に私の弾が切れるころには、ヴィヴィの阻害魔法が炸裂するはずだ。
そう頭の片隅で考えていた。
「・・・っ」
しかし、そう甘くは無かった。
戦術殻が、被弾を気にせずこちらに突っ込んで来た。
見かけによらず素早い。いくら人間サイズとはいえ、あの装甲兵器を導力ライフルと拳銃だけで止められるとは思えない。
「来たよ！」
一言だけ言い放ち、私は思い切り横に飛ぶ。
突っ込んできたのなら、このまま十字砲火に持ち込めれば・・・！
「・・・え？」
コレットの呆けた声。
土煙を上げながら片膝を付いてライフルを構えた私の見たものは、リロードを終えたままの棒立ちで、目の前で今まさに攻撃しようとする戦術殻を、呆然と見ている姿だった。
「間に合って！」
駆動時間が終わり、リンデが叫ぶ。
戦術オーブメントが光ると、同時にコレットと私の周囲にも光が走り、導力魔法「ラ・クレスト」が発動。
「う〝っ！」
振るわれた戦術殻の下肢が、コレットの腹部に直撃した。表情が強張る。鈍い呻き声を漏らし、尻餅をついて、それでも勢いが有り余ったのか、地面に転がった。
「駆動完了っ、逃がさないわよ！」
直後に、ヴィヴィの「シルバーソーン」が発動。戦術殻が光に包まれて、直後に轟音と金属の軋む音が聞こえる。

「コレット！」
導力魔法の効果か、動きの鈍くなった戦術殻に残り少ない弾を遠慮なく叩きつける。
5、4、3、2、1・・・弾切れ。
空の弾倉を排出し、左手と肩でライフルを支えて狙いを外さないまま、右手のみで新しい弾倉を機関部に叩き込む。コッキングレバーを引いて初弾をチャンバーに装填。
「うぅ・・・なんとか・・・」
腹部を腕で押さえながらも、立ち上がろうとしているコレット。
間一髪でラ・クレストが間に合ったらしい。導力魔法によって底上げされた防御力は、ダメージこそ防げなかったものの、戦闘不能にさせられることは回避していた。
「コレットさん！今回復します！」
リンデがコレットに向け、回復魔法である「ティア」の準備に入る。
「何とか戦線は維持させたいけど・・・！」
私はとにかく撃ち続けるしかない。コレットがダウンしている今、敵と直接相対できるのは私だけだ。
ライフルが連続して弾を吐き出し、そのたびに身体を揺さぶる反動が肩に伝わる。
「うそ・・・！」
ヴィヴィが、戦術オーブメントの駆動に入ろうとして、失敗した。
先ほど発動したシルバーソーンは、かなりの量の導力を消費するものだったはずだ。だとすれば、今ヴィヴィの導力エネルギーはほぼ枯渇している筈。
「それっ！」
ティアが発動し、コレットの傷がある程度癒える。
「あ、ありがと！」
「また動き始めた、注意！」
同時に、戦術殻が混乱から立ち直り、突進を再開した。
恐らくはさっきから射撃を続けているせいだろう、まっすぐ私に突っ込んでくる。

「こっちに来てくれるなら、それだけは好都合、かな」
相対距離が数アージュを切ったところで、私は射撃を止める。
視線は相手に向けたまま、ライフルを頭上に掲げて銃床の底面、普段は肩に当てる部分を前に向けた。
戦術殻が下肢を大きく振りかぶる。
接触間近。
「はぁっ！」
大きく踏み込み、銃を思い切り振り下ろし、銃床を戦術殻の頭らしき所にに叩きつける。
金属の塊を叩き付けた、豆粒程度の弾とは比べものにならない衝撃に、戦術殻がくの字に曲がる。
「おらっ！」
それだけでは止めない。
振り抜いた銃床を握り直し、下を向いた戦術殻の頭に向け、アッパーカットのように振り上げる。
掌にビリビリとした感覚が流れ、大きく仰け反る戦術殻。
「離れろっ！」
右脚を振り上げ、押し出すように戦術殻を蹴り飛ばす。
弾き飛ばしたそれを片目に、体勢を立て直して。
よし、直接弾を叩き込んでやろう。
ライフルを構え直す時間が惜しい。右腕を素早く下ろし、拳銃を抜こうと腰に伸ばした手が・・・

虚しく空を切る。
「あ・・・！」
今日は、拳銃（サイドアーム）を携行していなかった。
僅かな時間とはいえ、その隙を見逃してもらえる筈もなく。
「くっ！」
突進してきた戦術殻に弾き飛ばされる。
何とか身を捻って衝撃を逃がし、地面に転がることは防げたものの、追撃が来たら確実にやられる。

無理矢理身体を動かして攻撃に備える。しかし、そこに敵は居ない。
「ちっ！」
戦術殻は、私を無視してリンデに向かって凄まじい勢いのまま突っ込もうとしている。
「ひっ!?」
「あっ・・・」
直接攻撃されることを考えていなかったリンデは、驚きと恐怖に顔が引き攣り、身体を強張らせて後ずさることしかできない。
ヴィヴィも、咄嗟の自体に慣れていなかったのか、その場に立って驚きの表情を浮かべるのみ。
「だめ・・っ！」
コレットが構えるも、射線がリンデと重なっている。もし外した場合、その流れ弾はリンデに直撃することになる。

仕方ない。
導力ライフルのリミッターを解除、訓練出力の最高値まで上げる。
身体が覚えている通りに、右足を半歩引き、腰を落とす。銃床をしっかりと肩に当て、脇を閉じ、銃を確実に保持する。
背筋は少し前に倒し、右頬を銃床に押し当てる。頭は斜めにしないで、両目を開いたまま、照準器を覗き込む。
左目で大まかな動きを見て、右目の視線上にフロントサイトとリアサイト、その先に敵を重ねる。
狙いは、頭部と下肢の境目、関節部。
掌から余計な力が消え、引き金を絞る。
「・・・！」
次の瞬間、一際大きな発砲音と閃光。
数段強い反動と共に太い曳光を描いた弾は、今にもリンデに襲い掛かろうとしていた戦術殻、そのど真ん中に、寸分違わず直撃した。
金属の衝突する音。強い衝撃に動きを止めた戦術殻は、そのまま戦闘開始前のように動かなくなった。

「そこまで!」
教官の声が響く。
それと同時に、私以外の皆が地面にへたり込んだのだった。

「う～ん・・・一応勝ったとはいえ、なんだかな～」
試験終了後、コレットが呟く。解放感こそあったが、今回の試験になにか思うところもあったらしい。
「まぁ、初めてだし。次もできるからね」
相変わらず私の励ましは、励ましの言葉になっているのか自分でもわからない。せめてもうちょっと気の利いたことを言ってみたい。
「・・・はははは、そうだね。うん、その通りだね～」
その微妙な励ましを聞いたコレットが、私を見て小さく笑う。不思議と悪い気はしない。優しさを感じる笑みだからだろうか。
サラ教官から解散の指示が飛び、クラスの皆もばらばらとグラウンドを後にする。
私もそれに続いて歩き出そうとした時、その教官から呼び止められた。
「あー、リーリャだっけ?あんたはちょっと残りなさい。」

「どうかしましたか?」
人の居なくなったグラウンド。私の前に、サラ教官が立つ。
「うーん、そうねぇ・・・」
何かを考えているような声、その目は私を品定めしているかのように動いている。
・・・この緊張感。ヤバい。サラ教官、この教官は、恐らく只者ではない。それこそ、稀にいる本当に逃げるべき相手の香りがする。
「あんた、ちょーっと怪しいのよね。」

「怪しい、ですか？」
しばらく感じていなかった緊張感。冷汗が流れる。
「そう、というわけで」
対照的に、軽い雰囲気と口調で話すサラ教官。私から離れるように数歩、何の不自然さもなく、それでいて隙も見いだせない歩み。
十数アージュほど離れて、試験の時のように私と相対する教官。
その手には、いつの間にか、紅い導力拳銃と剣が握られていた。
「掛かって来なさい。あぁ、そうそう。わざと手を抜いたら単位は無しだから。」

# 対人戦闘

広いグラウンドを駆ける二つの人影、時折、甲高い発砲音が響く。
「狙いは正確ねー」
私が発砲した三発を、姿勢を下げて右に向かって走り出すことで難なく回避した相手、サラ教官は、余裕綽々といった態度を表す。
「でも、それだけじゃ当たらないわよ」
「そんくらい分かってますって」
弾倉の半分近くを消費しながら、徐々に距離をとる。
教官もまだこちらを警戒しているのか、回避を続けながら様子を見ているだけで、こちらに突撃はしてこない。
しかし、そのかわりに教官の手元から閃光が奔る。
「っ!?」
教官の導力銃が放たれる。
咄嗟に横に飛んで回避すると、私がいた足元に着弾の土煙が上がった。
まずい、ヤバい。
この隙を突かれて一気に接近されてしまうと、私に抵抗する手段はもう無い。
転がった後の無理な姿勢ながらも、なんとか右膝を地面に着け、左脚で横に飛びそうな体の勢いの残滓を押しとどめて、膝射の姿勢を取り、発砲。
「おっと、そう易々とはいかないみたいね」
剣の腹で弾を弾き、後ろに飛ぶ教官。
体に負担を掛けた引き換えに、教官の接近は阻止できた。しかし、それまでに開けた距離は完全に詰められてしまっている。
「やっぱり、ねぇ。実際に見て確信したわ」
そろそろ、教官の速度にも慣れてきた。銃口を僅かに、教官の移動先の方向へとずらす。

偏差射撃。
引き金を引く時間、導力加速機構の駆動時のタイムラグ、距離、相手の速度。これらを全て計算し、相手の未来位置を予測して射撃を行う技術。
私はこれを、様々な旅団員との模擬戦を通して、感覚として体に覚えさせた。
それなりに自信もある。しかし・・・
「アンタねぇ、のんびりそうな雰囲気の割にやってる事がきな臭すぎるのよ」
即座にブレーキを掛けた教官は、素早い方向転換で射線を避ける。
やっぱり、ね。
この世界には、様々な戦闘に従事する人々が居る。軍人や猟兵、警察官。遊撃士にテロリストに、なんかよく分からない秘密結社の人だったり。
その中でも、俗に言う実力者と呼ばれている人達。
様々な修練を積み、それなりの力を持つ者達は大体、身体能力に優れていて、そして、動体視力も良い。
つまり、射線を簡単に回避される。
銃口の動きを読んで射線から身を逃れるのは普通で、上位の実力者は発射後に弾を見て回避することもあるらしい。
中々照準に捉えられず、また、撃っても当たりそうにないサラ教官は、間違いなくこれだ。
「その体全体で銃を抑え込むような構え方。それ、かなり〝反動〟を意識してるように見えるのよね」
「そうですか・・・!」
決定打の掴めない射撃で弾倉の残り半分を消費し、弾切れ。
次の瞬間には、教官の剣が目前に迫っている。
「のわっ!?」
「それも強力な火薬式銃器のを、ね」
銃の腹で、その刃を受け止める。この教官本気で私を殺す気なの

か。
カウンター気味に右脚を蹴り出してみるものの、教官は素早く飛び退いて、手応えは無い。
「それから、さっきの銃で殴り付けるあれだけど・・・導力銃は導力機構が入ってる、いわば精密機器」
教官が離れた隙にリロードを行う。
素早く、かつ正確に。ここで戸惑ったら、確実に、やられる。
自己ベストを更新できるほどの短時間でリロードを終わらせ、再度教官に照準を向ける。
「・・・!」
しかし、そこに教官は居なかった。
視線自体は外していなかった筈。意識が反れているほんの僅かな時間で、体勢を立て直して消えたというのか。
流石に学院教官といえど、そこまでの達人とは。
とにかく、立ち止まるのは不味い。
幸いグラウンドは視界が通っていて、物陰から急襲される恐れは無い。そして、正面に居ないのであれば上か、後方かだ。
間髪入れずに走り出そうと足を踏み出す。
「あっ」
その足は、気配も無しに背後へと接近していた教官より繰り出された足掛けによって防がれ、体勢を崩して片膝を着いた。
「だから普通は銃に着いてるブレードなんかを使うわけだけど、アンタは何の躊躇いも無く叩き付けていた。それが出来るのは、言ってしまえば只の鉄の塊である火薬式の銃だけよ」
教官を見上げる私、首筋に白刃が突き付けられる。
「結構使ってるんでしょ、火薬式銃器。それも、導力銃とは比べ物にならない程に。」
「・・・。」
この教官は予想以上だ。僅かな時間にそこまで観察されているなんて。
「で、本気を出さないなら単位はあげないけど。どうする?」

正直、この教官とはまともに戦いたくはない。
もしここが戦場で、同じ状況に陥ったのなら、どんな手段を講じてでも戦わずに真っ先に逃げ出している。
しかし今は学院の授業で、模擬戦。ここからの勝ち目も見えないし、これ以上続けるよりだったらさっさと降参してしまいたい。
しかし、頭ではそう考えていても、私の中身・・・闘争心とかそう呼ぶべきもの・・・が一回り大きくなっていくのを感じる。
不意に思い出す、霞む視界で見上げたチェーンソー付きのライフルを。その赤髪を。
これは、怒りだ。コンプレックスと言ってもいいかもしれない。
圧倒的な実力差で、有無を言わさずねじ伏せられる事に対する、怒り。
こんなことを思ってしまっている時点で、私は結構な戦闘狂なのかもしれない。まぁ、今はそれでいいかな。

私には、銃弾を見切る事も、ましてや大技で敵を薙ぎ倒す事もできない。
軍用火器の取り扱いならば、それなりの心得はあるが、それだけだ。教官のような相手と1対1でまともにやり合おうものなら、容易く今のようになるだろう。
しかし、今の私にとってそれらの事は、銃を置く理由にはならない。
教官も本気を出せと言っているんだ。どうせ模擬戦だし、死ぬことはない・・・と思う。
なら、精々食い下がらせてもらいますか。
「ふーん、闘志はまだありそう・・・!?」
決断すれば、あとは実行するだけだ。
教官の顔の前で振り抜く、空の右手。
片膝をついた体を支えるために、その体の後ろに回し隠していた右手に握っていたグラウンドの砂を、思い切り投げつける。
「さすがにやる気ありすぎじゃないのっと!」
咄嗟に飛び退いた教官目掛けて、ライフルを向ける。

お行儀よく狙いなんか付けてやらない、避けられるというならば、処理できなくなる位徹底的に叩き込んでやる。
腰だめに向けたライフルの引き金を、壊すのかと思うほどに連続して引く。
連続した閃光がストロボのように瞬く。自分でもどこに飛んでいくか分からない連射は、教官にとっても相手にしにくいらしく、右に左に跳んで距離を取った。
好都合。
腰に手を伸ばして、円筒形の金属筒を掴む。
ベルトからそれを引き抜き、チェストリグに着いている小さな金具に、輪っかを引っかける。
そのまま思い切り引くと、金具に輪っかが引っ掛かり、ピンが抜ける。同時に、ピンによって保持されていたレバーも、バネの力によって勢いよく金属筒から弾け飛んだ。
あとは思い切り振りかぶって、それを投げる。
「！」
教官の前に転がる金属筒。それを見た教官が、咄嗟に目を庇いながら飛び退く。
閃光弾対策・・・？
でも、残念ながらそれは閃光弾じゃないよ。
直後に、その金属筒から勢いよく黄色の煙が噴き出した。
「煙幕って！」
スモークグレネード。大量の煙で視界を奪ったり、位置を指示したり出来る優れもの。私のお気に入り。
その効果はこの場でも遺憾なく発揮され、教官と私の間に煙幕の壁を作る。これで、私達は互いに姿を見失った訳だ。
でも、まだ攻撃を緩めるつもりは無い。
煙幕に紛れた急襲を警戒しているのか、教官は大きく動かない。
それを尻目にポーチから取り出したのは、望遠鏡のような形をした便利グッズ「バトルスコープ」だ。
内蔵導力の関係で実質的に使い捨てのこれをすかさず起動して、煙

幕の壁を、自分から見て右から左へ、横になぞるように覗き込む。
そして、ある一点の方向でスコープが僅かに反応した。
アナライズが始まる音。それに構わず、左手でスコープを保持しながら銃を構えて、反応のあった方向に銃口を向ける。
連射。銃弾が煙幕へと吸い込まれていく。
そして、弾切れ。
幾度かの金属音の後、紫電と共に煙の壁を割りながら、教官が一直線に突っ込んで来る。
マガジンポーチは全て空、右腰に着いている多目的ポーチを開いて、最後の予備弾倉を取り出す。
「機転は効くみたいね！」
空になった弾倉を地面に落とし、最後の弾倉を銃に叩き込む。
その時には教官が、もう目の前まで来ている。
流石に速い・・・！

私は銃床を強く握ると、ライフルを思い切り教官目掛けて投げつけた。
「！」
多少は驚かせることができたものの、突撃の勢いのまま、ライフルを難なく剣で弾いてしまう。
接触まで残り僅か。
教官が導力銃を突き出す。私はそれに、避けもせず、下がりもせず、前に思い切り踏み出した。
咄嗟に下げた姿勢、間一髪、私の頭上を銃弾が飛び去る。
「アンタ、結構面白いわね・・・っ！」
教官の左腕、銃を持っているその手首を、右手でがっちりと掴む。
そのまま突撃の勢いを利用し、コマのように体を半回転させ、教官の手首を握ったまま右腕全体を使い、教官の左腕をホールド。
間髪入れずに、左手の平で教官の導力銃の側面を思い切り叩く。手の平は構造上、この方向の衝撃に弱い。
緩む教官の掌。私は躊躇いなく、その手から導力銃を毟り取る。

「それはさすがに予想外よ！」
飛び退きながらも姿勢を無理やり制御して、奪い取った導力銃を向ける。
細かい狙いを付けている暇は無い。
とにかく引き金を引いた。教官も、傍目からも無理があると分かる体勢で飛び退く。

もう手は無い。
導力銃の引き金を引き続けていると、不意に教官が大きく跳躍した。
その体は、紫電を纏っている。
「っ!?」
咄嗟に転がる私。その横に、隕石のように着弾する教官。
『電光石火』
荒れ狂う電撃。それは、回避は無意味だと言うように周囲を飲み込み、私に襲い掛かる。

身体を突き抜ける衝撃に一瞬、意識が飛ぶ。
力が抜けていく感覚。
次には、グラウンドの上で無様に転がり、手足を地面に投げ出していた。

「・・・はぁ」
教官が差し出した手を掴んで、起き上がる私。
さっきの電撃のせいか、まだ思うように力が入らない。
・・・っと

「大丈夫？」
「はい・・・問題無いです」
転びそうになった所を、咄嗟に支えられる。
負けた。
惜しいかどうかは分からないけれども、いいところまでは行けた、と思いたい。
「やっぱり、無理があったかなぁ」
地面に落ちている導力ライフルに目を落とし、自嘲気味に呟く。
「何を考えてるのかは知らないけど、あそこまでやれるんなら大したものだと思うわよ。」
教官の励まし。さっきまでの態度とは大違いだ。
「で、結局のところ、アンタは猟兵か、元猟兵ってことでいいのよね？」
まあ、そういう結論になるだろう。
今現在、火薬式を使っているのは、大体猟兵と相場が決まっている。

観念して、口を開こうとしたその時
「本気出せば良かったんじゃない、リーリャ」
聞き覚えのある声が耳に届く。
声の主。グラウンドの入り口、その階段上に立っているのは、特科クラスⅦ組の赤制服を着た女子生徒。
整えられていない白い髪と、常に眠たそうな表情。
人よりも小柄な背丈は、私の記憶の中となんら変わっていない。
こちらを見ている黄色い瞳に、不意に強い懐かしさを覚える。
旅団に居た頃を思い出す。もう会うことは叶わないと思っていた、その子。
「――――フィー!?」
「ん、久しぶりだね。」

# 再開、過去（前）

「――――フィー!?」

不意に聞こえたのは、もう二度と聞くことはないと思っていた声。

目の前に居るその少女は、自らの記憶にあるままの姿でそこに立っていた。

いや、厳密に言えば目の前の少女は士官学院の制服を着ている。

その色は、紅だ。

「ん、久しぶりだね。」

短く、透き通る白髪。

全てを見透かしてしまうかのような黄の丸い瞳。

幼さをの残る、滅多に動かない表情。

相変わらずに、気まぐれな子猫を思わせる雰囲気を纏ったその少女

……フィー。

元《西風の旅団》所属、特科クラスⅦ組フィー・クラウゼルが、階段上から不意に跳躍する。

「えっ、ちょっ・・・!」

音も立てずにふわりと飛び上がった彼女は、そして重力に引っ張られ、そのままこちらに向けて落ちてきて。

「ーーーわっ・・・!?」

受け止める。小さな体に塞がれる視界。

ぽすり、と私の出した両腕に収まる華奢な体躯。

それを落としてしまわないよう、しっかりと抱き留める。

予想よりも軽い衝撃。二、三歩退がるものの、フィーの腕が私の背中に回るのを感じた。

「・・・っと」

ゆっくりと、その体を地面に下ろす。

しかし、互いを抱き留めている腕は離さない、離れない。

「・・・さすがに死んだかと思ってた。」

フィーの、変わらないいつも通りの口調。

そこに、僅かばかりの強がりが含まれていることは、すぐに分かっ

た。
「まぁ・・・しぶとさには自身があるから、ね」
だから、私も少し強がってみせることにした。
「フィーこそ、ちゃんと生活できてたの？」
「ん・・・問題ない」
なんともフィーらしい、極めて短く、端的なその言葉。
それすらも、今は懐かしい。
「・・・聞いたよ。団長の一騎討ちの事」
私より、頭一つ分ほども小さな体
「ん・・・それで、病院から？」
「うん。残党狩りを警戒して、ね」
「そうなんだ・・・」
こちらを見上げる表情
「とにかく」
ふと、その形が和らいだ。
「生きてて、良かった・・・」

「あー・・・私、もしかしてお邪魔だったかしら。」
「サラ、居たんだ。」
「居るわよ。というか、随分と仲よさげみたいだけど、つまりはそういうことよね？」
「はぁ、まぁ・・・」
「ん、リーリャは私の仲間。西風の・・・家族。」

---

2年前
ゼムリア大陸中西部サンタ・クララ市郊外

なだらかな丘陵と森林が連なり、南国の穏やかな風が吹く田園。それが、戦前のサンタ・クララの評判だった。
これまでの主戦場は主に、砂漠化の進む東側の不毛地帯であり、国の中心地に位置するここは未だ戦禍に巻き込まれておらず、表面上では静かだ。
しかしその静寂も、東から進撃してくる反政府軍によって、あと少しで終わるだろう。
目の前にある政府軍の前線基地も、その反政府軍を撃退するための物なのだろうから。
「・・・。」
視界を覆っていた木々が途切れ、深い森林の中にあっても陽光が落ちているこの広場において、私・・・フィー・クラウゼルは、深い森の奥に意識を向けて、魔獣や敵兵がやってこないかを警戒している。
「・・・」
何気無く足許の小石を蹴り飛ばす。
私は・・・うまくは言えないけどモヤモヤしていた。
集結地点で私に言い渡された命令は「敵前線基地への破壊、妨害工作」だった。
敵戦線後方とはいえ、市内が戦場となっている今、そこに到達するのに何ら障害は無い。やる事も、少々の爆薬を仕掛けるなりして敵を萎縮させれば良いようなものだ。
団長やゼノ、レオ達は皆市内の方へと向かっている。つまり私は、苛烈な主戦場から外され、「比較的穏やか」な任務に回されたのだ。
「足手まとい、なのかな」
自嘲気味に呟いた声は、不意に吹き抜けた風に掻き消された。
「うーん・・・民間人はほぼ居ないから、確実に砲撃合戦になるし、インフラはメチャクチャになる、多分ね。」
私が哨戒している中、その後方に居るのは、同じく破壊工作を命じられたリーリャだ。
「ほうほう、つまりは共和国系の、民間の建設会社が狙い目ってことかな？」

その向かい側で話しているのは、《北の猟兵》の〝ティリア〟と呼ばれているリーリャと同年代の、武器弾薬の調達と配達を専門としている猟兵だ。火薬式の武器を幅広く扱っているらしく、どうしてもという場合は自前で設計までするらしい。
火薬式の武器を主とするリーリャは、よくティリアに補給を頼んでいる。
確か今は《ニーズヘッグ》と提携してる、と言っていたか、彼女の後ろで反対側を哨戒している数人は、そのニーズヘッグの所属のようだ。
「そういうこと。」
二人の横には、大量の物資が積み込まれた導力トラックが1両。リーリャが注文した武器弾薬、その他必需品だ。
「兵器会社のほうは？」
「ここで大体決まるだろうし、軍需関係はこれからストップ安が続いて一気に値下がりかなぁ・・・」
「じゃあ～・・・そうだ！ヴェルヌ社の民間向け導力車部門とかの銘柄！土木工事とか運輸用に大量発注されるかも！」
一方その二人は、株価がどうの銘柄がどうの、よく分からない話をしていた。
リーリャの言うところによると、戦争が始まったり終わったりする事自体で儲けてるらしい。
《西風》の持つ影響力はそれで儲けるのに相応しいのだと。
「あ、それいいねぇ。私のもお願い」
「おっけー！任せといて～」
「ティリアさーん！そろそろ防空レーダーが復旧してしまいますよー！」
二人の話が一段落したらしい所に、哨戒していたニーズヘッグの1人が声を掛ける。桃色の髪を二つに結んでいる、ナイフ使いだ。
「おっけーアイリ！今いくー！」
その声に振り向いたティリアは、リーリャと・・・私の方に手を振り、ウィンクを残して、ニーズヘッグと共に森の奥へ去っていった。

「さ、いこっか」
見上げると、リーリャが森の穏やかさによく似合う柔らかい表情を浮かべていた。

基地より南西の森林内
「・・・けっこう大きいね」
「そうだねぇ」
双眼鏡の先、レンズを通して拡大された視界の先には、大規模な基地が広がっていた。
バラックを拡張させれば最大でおおよそ一個連隊、３０００人規模の兵力を駐屯させることが可能だろう。
南側中央のゲートを出入口とし、周囲をフェンスと土嚢壁、鉄条網で囲われた中、北側と南側には半円筒形やテント式の兵舎が多数建ち並び、中央にはプレハブの建物・・・おそらく司令部だろうものがある。
東側は倉庫となっており、多数のトラックや装甲車両、戦車まで停まっていた。武器弾薬も豊富に備蓄されていると見える。
西側は・・・飛行艇の発着場だ。
敷地を四角形とすると各頂点にそれぞれ高さ１０アージュ程度の監視塔が存在し、基地周囲は2セルジュ程度の距離まで開けた土地となっている。
今現在、駐屯してるのは一個大隊くらいか。
どうするにしろ、相手は重装備を持つ正規軍だ。真正面から挑めば西風の総力を以ても厳しいだろう。
「・・・！」
後方に気配、距離は６０アージュ程度。２人・・・敵のパトロールだ。
幸い、こちらには気が付かなかったらしく、気配はそのまま遠ざかっていった。

草に偽装したネットが役に立ったようだ。
「下手に手を出すと危険。どうする？」
双眼鏡から目を離し、隣で同じように基地を観察しているリーリャを見る。
「んー、まぁ・・・想定してた以上ではないし、壊滅させとこうかな」
「・・・本気？」
思わず私は眉を顰める。
とある有名な学者の言葉で、戦闘における損害は（Ｘｔ^ ２／α）－（Ｙｔ^ ２／β）の式で表される、と聞いたことがある。意味はよく分からないがリーリャが言うには、数の多い方が圧倒的に有利、ということらしい。
２対多数、そもそも数じゃ勝負にならない。
しかし、そんな私の懸念を余所に当の本人は
「本気も本気。こんな拠点残しといたら、前線が面倒になる」
普段と変わらない様子を見せている。
「・・・どうするの」
「じゃあ・・・今から１２時間くらい使って基地の周囲を掃討してほしい、かな。あぁ、魔獣だけね。人間には絶対に見付からないように」

---

１４時間後、深夜

「行くよ・・・！」
周囲を照らすサーチライトの光条が通り過ぎたのを見計らい、飛ぶように走り出す。
基地まで１５０アージュ、小さな破裂音。
リーリャが撃ったであろう火薬式狙撃銃の銃声は、減音器によって夜の風音に紛れる程に静かだ。
そして、その射撃は正確に監視塔の兵士を打ち倒していた。
残り１００アージュ。双銃剣をホルスターから抜く。

破裂音が２回、正面の機関銃陣地に詰めていた兵士二人が、ほぼ同時に倒れる。
横に螺旋を巻いた鉄条網のバリケードを飛び越える。残り５０アージュ。
『そろそろ位置に着くね』
リーリャからの無線と同時に、監視塔の根本にたどり着いた。
間髪入れずに跳躍、壁を蹴り一気に監視塔を登る。
「ん、始めるよ」
監視塔からは、基地内部が広く見渡せた。
「ここからなら・・・」
双銃剣を床に置き、背中に手を回して掴んだのは、全長７０リジュ程度の筒。背負った３本のうちのひとつを目の前に持ってくる。
その後部の蓋を開けると、中にあるもうひとつの筒を引き伸ばし、右肩に乗せて構える。
リーリャが用意した、使い捨ての火薬式携行型軽対戦車砲。
倒立式の照門と照星を起こし、狙いを着ける。
目標は、基地中心部・・・その一角に存在する導力アンテナ群。

---

突如鳴り響いた爆発音に、基地司令を始めとして将校達が集まっていた司令部は騒然となった。
「何事だ!?」
直後にもう二回、同じ音が鳴り、地面が揺れる。
「奇襲・・・反乱軍の浸透攻撃かもしれん、警報を出せ！被害状況を確認！哨戒と検問所、前線司令部にも確認しろ！」
司令官は素早く指示を飛ばすが、直後にそれは、無線手によって遮られる。
「・・・駄目です！通信が繋がりません！」
「何だと！」

そこに、一人の兵士が慌てた様子で駆け込んできた。指令棟の門番だった兵だ。
慌ただしいながらも敬礼を行う門番は、そのまま声を張り上げる。
「通信アンテナが破壊されました！砲撃です！飛行艇と、南西監視塔もやられました！」
途端に、将校たちは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。
「何ということだ・・・司令、これは計画的な襲撃です」
「だろうな・・・。よし、伝令を出し指揮系統を回復する！少佐、小隊を一つ借りるぞ。」
「はっ！」
副官と中隊長の少佐が伝令の内容の確認を始める。
そうしている間に、一際大きな爆音が鳴り、兵舎の方から火の手が上がった。
「重砲まで装備しているというのか・・・」
音を立てて飛翔してきた砲弾が、空中で炸裂する。それによって生まれた高速の弾片は雨のように降り注ぎ、直下に居る兵士達を兵舎単位で薙ぎ倒し、それが連続する。
いきなり最前線に放り込まれたとも錯覚するほどの砲撃だ。
「敵の砲兵はまだ見つからないのか！」
「もしかしたら南西のほうかもしれません。監視塔が破壊されたのも、見つかりにくくする為だと」
「しかし、妙です。１５リジュ級の重砲ならば嫌でも目立つ筈ですが、歩哨からはそのような痕跡があった報告すらも上がっていません。それに、いくら高精度の砲だとしても、たったの一撃でアンテナに命中させるなど・・・まさか！」
「報告します！北西監視塔の兵が行方不明！戦闘の跡を認む！」
「・・・基地内に侵入者が！」
次の瞬間、天井を貫通してきた砲弾が、司令室のど真ん中で炸裂した。

---

北西監視塔
「・・・命中、射撃停止。」
基地内の各所で火災が発生し、辺りが炎の明かりに照らされる中、屋根の上で寝そべりながら双眼鏡を覗く。
視界の先で爆散するプレハブ小屋、それを確認しながら私は、無線に向かって呟いた。
『よーし、次』
その向こうからは、能天気とも取れる声。しかし、不思議と悪い感じはしない。
そして、言われた通りに次の目標物・・・破壊すべきもの、重要施設を目で追おうとした時。
「次・・・まった」
『どうしたの？』
「敵砲兵がそっちを狙ってる、１０リジュ級の榴弾砲が３門」
南西の方を向いている、タイヤが二つ着いた牽引式の大砲・・・おそらく１０．５リジュ榴弾砲が３つ。
いくら監視塔を破壊しているからといっても、あれだけ撃ってたら流石に見つかるか。
と、そこで自分の居る監視塔の下に、沢山の気配が集まるのを感じた。
「っ・・・足元が騒がしくなってきたかも。別の地点に移るね」
そう言うは早く、跳躍。
監視塔の陰、炎に照らされてより一層濃くなったその影の中に、音も無く着地する。
『りょーかい、っと。パトロールに見つかった！私も射撃ポイント変えるよ』
辺りの気配を素早く探り、破壊された兵舎の陰から陰へと走る。
幸いにも、敵の意識はさっきまで居た監視塔の方へと向いており、私はその間を見付からずに潜り抜けることが出来ていた。
その時、大きな破裂音が三回、ほぼ同時に鳴り響く。
榴弾砲の発射音だ。

それを横目に、懐から手書きの地図を取り出す。
その地図には縦横に罫線が入っていて、基地内の施設や戦力配置なんかが、事細かに記されている。
この地図を用意したのはリーリャだった。
私が基地周辺を掃討していた１２時間弱、その間にリーリャはひたすら基地と、その内部の兵力を監視し続け、なおかつ正確な縮尺でそれを書き上げていた。
私が掃討を終えて戻ってきた時に、リーリャの頭の上には小鳥が留まっていたくらいなので、どんなに監視を行っていたかは大体想像がつく。
『移動完了、射撃用意よーし』
「火力支援要請。座標。Ｘ、５、２、０。Ｙ、６、３、０」
読み上げるのは罫線に書かれた数字、それから表せる砲撃陣地の位置。
地図に記されている建物の位置関係から榴弾砲の位置を目測で割り出し、そこに走っている罫線の数字を横、縦の順番でリーリャに告げた。
『座標Ｘ５２０、Ｙ６３０、発着信管。半装填～発射！』
リーリャの気の抜けた掛け声と共に、ポン、という発射音が無線の向こう側から聞こえる。
火薬式の１２リジュ重迫撃砲の発射音だ。
高性能爆薬を弾頭に充填しており、導力砲に換算すれば１５、もしくは２０リジュクラスのものに匹敵する破壊力を持っている。
さらに、その迫撃砲をトラックの荷台に載せていて、素早い移動が可能らしい。
さしずめ自走迫撃砲だ、とリーリャは言っていた。
恐らくは、先程の対砲兵射撃からも難なく逃れられたのだろう。
そして、砲弾が飛翔する風切り声の後、爆音。
リーリャの放った砲弾は砲兵陣地から大きく外れ、駐車されている導力トラックの列を吹き飛ばした。
「初弾、西に６０アージュ、北に９０アージュずれたよ」

『了解、西６０に北９０で・・・こっちは２５ミルくらいかな・・・と、修正完了。第２弾、発射ーー！』
再び発射音。
しばらくの後、飛んできた砲弾は敵砲兵陣地の真ん中で爆発した。
「命中したよ、効力射」
私のその合図をきっかけに、次々と砲弾が飛来し、同じように炸裂する。
１秒に１発のペースで飛んでくるそれによって、あっというまに砲兵陣地が叩き潰されていった。
リーリャは、戦術オーブメントの身体能力向上機能によく馴染むらしく、素早くはならないが、物を持つのには苦労しなくなるらしい。
本来人１人分の重量を誇る１２リジュ迫撃砲弾を片手で掴み、ポンポンと砲口に投入していく姿を見たある団員は
『１人で１個砲兵中隊に匹敵する火力』
と言っていた。
事実、突然始まった砲撃に敵はまったく対応できていない。
そうしている内に、敵砲兵陣地で大爆発が起こった。
積んであった導力砲弾に直撃し、一斉に誘爆したのだろうか。陣地はまるごとひっくり返されたかのように土砂にまみれ、そこに砲が設置してあったとはとても思えない有り様だった。
「敵砲兵陣地の破壊を確認、射撃停止」
『はいよー、射撃停止。丁度砲弾使いきったとこだったし、ギリギリだったかな？』
あははー、と間の抜けた笑い声を漏らすリーリャに少々呆れかけたとき、基地の一角に違和感を感じる。
「・・・まった」
『どうしたの？』
物陰から確認すれば、基地の正面ゲートに集まる敵の姿を確認できた。
歩兵だけではない、無砲塔の旧式とはいえ戦車も居る。
「敵が集結してる。戦車３輌にトラック５輌、歩兵が中隊規模。多分、

そっち狙いだよ」
『あー、なるほど。そりゃさすがに出てくるよね。おっけー、こっちで対応しとくね』
リーリャの声は、緊張を感じさせないままだった。